

日本古義

四

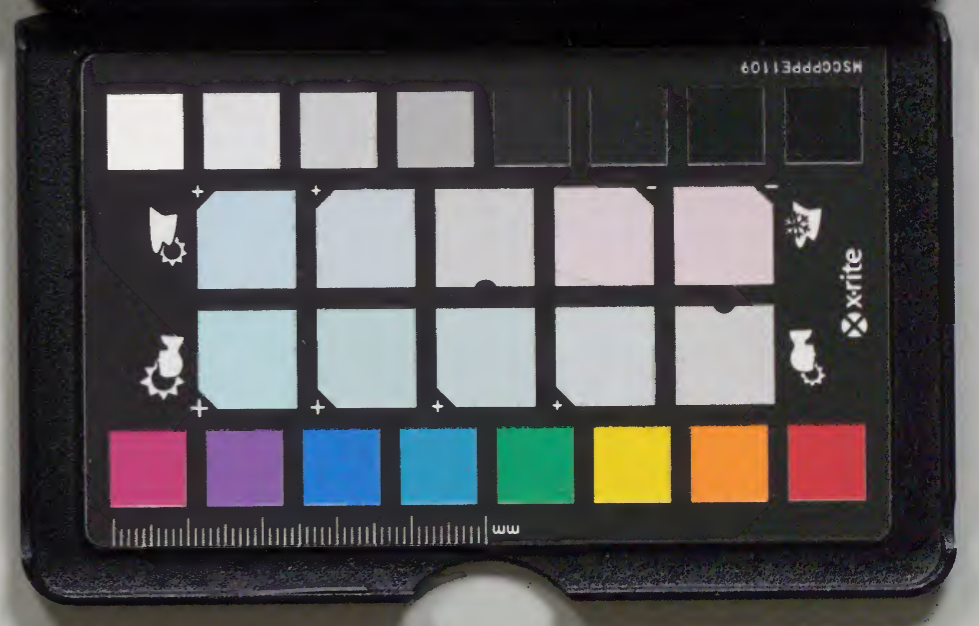
武備兵法

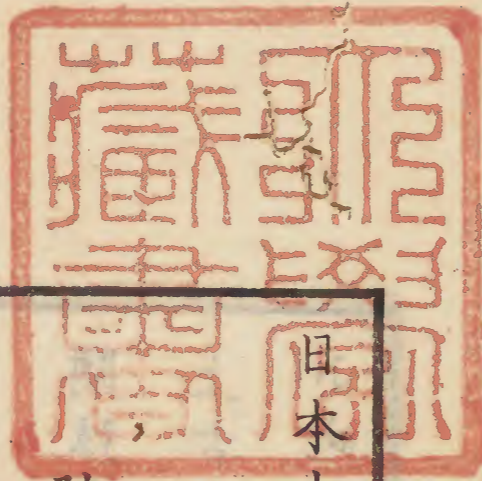
一	一	一	一	和書門
七	四	三	五	類
八	一	函	號	
三	架	冊	冊	
五	冊	架	冊	

五	五	七	和
四	九	四	書
函	冊	三	類
架	冊	五	類

内閣文庫	
番號	和 17435
冊數	5 (4)
函號	154 231

番外





日本古義卷之四

紀伊 高木尚三郎大伴正朝 述

淺草文庫

弦

四季艸尔法要録鈔を引用せし程云志乃關
 弦事射志先多弦成せたるをいふと射家
 古書乃説といへども其意違へりいふ射
 志先多弦をせくはしりとも射志乃を
 弦成せたるを志先關弦といふ心
 得
 志乃を志先關弦といふ心
 得
 志乃を志先關弦といふ心
 得

太矢細矢
義 矢といふ名

松喰ひま
めいといふ

尔倦きぬちり懸合も弓より曲尺成りて其直
り四分かと高く附きてとれり是を張高く
殊に先乃重た根矢尔用ゆを格恰と侍あり太
弦は關弦をいふ細弦とを常は白弦成いふか
了太矢とを征矢をいふ細矢とを操矢的矢は類
をいふなり太矢細矢とも篋廻りの木小輕重
に遠送り射ふやいふ但り矢と又射貫く物を試
る時尔を太矢關弦を用いてとれあり又矢乃熬
を厭ひて中關小鉛或銅を巻込て弦を重くと
るもあり又弦を喰ひ去るんといふも此理なり

日本古義四二

本義
音金といふ

射貫く物の
事

塗弦白弦と
用ゆる事

弦をぬくせぬ重くぬる故あり今世小音金と
いふてかのみ管を上關尔入ると弦拍子成り侍
く愚か子沙汰ぬるべし射貫く物を試るふを拳
をを押おろしうもく彈つべし活勢してとく射
貫くりり弓も詰牙に多幅廣く吾力尔少く強
と底力ある弓尔も最塗木鹿苑院殿村刮み弓
ありかくとを矢働まき事ありける小笠原貞宗
一御尋秘ありしにせ先々御事ふと申し是て
弦をりり塗る射多しといひ一は里あは歩射
尔を白木は弓を用ひ騎射あは塗弓を用ゆるを

本義と云ふ故なり是中古の例なり上古の朝廷
よく射禮に用ひられしり角弓ハ勿論丸木
弓も多く塗木あり御所乃御弓亦白木を
見え候いげも塗弓あり太神宮乃御弓を丹
塗若御弓なり

箠

箠ハ吾國故實は重器なり夜奈久比も衣比良
之本一乃器あり其製と名を別け公家亦多ハ
胡箠やいひ武家もそと箠といふ形奈衣比良と

會比良といふ詞を轉ひあるなりニギ靴を背セ尔ヤ脊平チ
負ふもみかきセ背セ靴といふ詞を省きて會比
良といひしを又詞轉ひ衣比良といふ形夜
奈久比と蒲ヤナギ靴ユキといふを約ツめキ乃キをヒ用下
多は詞にして胡箠といひ箠といふ意靴を一を
いふなり由岐とウケと訓むなり矢を受るその
といふ詞なり矢受箱或根受革かといふ例れ
了古代には箠を夜奈久比ヤナギも胡箠ユキ戎衣比良と
もいひしあり胡箠も公家も用ひらるる征戦の

場ふく用ひ古代には衛府守衛に武官束帶の
 上より弓箭を帶を執事常例あり是吾神武此國
 風儼然きる弓矢の禮容に遺風といふべし既小
 鎌倉殿名代に平胡籙尔矢はくむる丸緒附け
 しゃくあど東國乃武士を知らざりしに平家此
 侍武藤小次郎資頼といふその其事は知まはし
 一ふく調ひ進ら勢其罪ゆるされしと東鑑に
 見えしとま

日本古義四ノ四

年中行事

朝覲行幸供奉

胡籙負ひるる圖



表矢

表矢

古代武家あり製作せし逆頰籠ハ猪ハ頰皮以て
 逆さるふして根受を包こむ故に逆頰籠とい
 ふなり此猪ハ頰皮或熊の皮にて根受を包こ始
 めし頼義朝臣奥州征伐乃頃より此製なり此
 逆頰籠を造出してより葛籠をもりつる籠と
 混し誤るるいし習ふるあり總て物の名を唯自
 然に習ふるありあはるる矢をうくるも
 の形を以て受といひ葛籠を造りしを葛籠とい
 といひ逆頰籠を造りしを猪ハ頰籠といひ

早古義四五

猪ハ皮と賞
 さる古義

いふが如く皆其物其形ありて自然に其物乃
 名を呼習ふはくはなり人生を以て上を見り天と
 いひ下を見て地と知る天が天と地が地とを
 いふはあは唯自然に理あり萬物皆是に倣へり
 是とくはなり言葉ハ吾國の遺風あり
 籠羽壺を猪ハ皮にて包こ或葛股鋒根を以て透
 ふ猪ハ目以て用ひて猪を賞する事ハ吾國の古
 例あり攝津國能勢郡木代村所傳ふ云古神功
 皇后三韓を征し御凱陣の時 皇后太子 應神
 天皇

供奉し給ふあり香坂王 按とるふ仲哀天皇乃先后大仲姫み王子
魔坂王といふ 無道み人あり國家を奪ふむと
 て軍勢を催ふし皇后を滅すむゆを所ありて
 挑む戦ひ此山中ふ追驅奉り既み弑し奉らむと
 する處より猪多く出多香坂王ふ飛びかゝみ王詮
 方かくし大木み梢り昇る猪ふをを見て其木
 の根を穿ら堀りて打倒し終に香坂王み喰殺し
 永く是をひがしを哀ふ於る皇后太子共し
 危難を免むを給ふとれん天下静まりて後

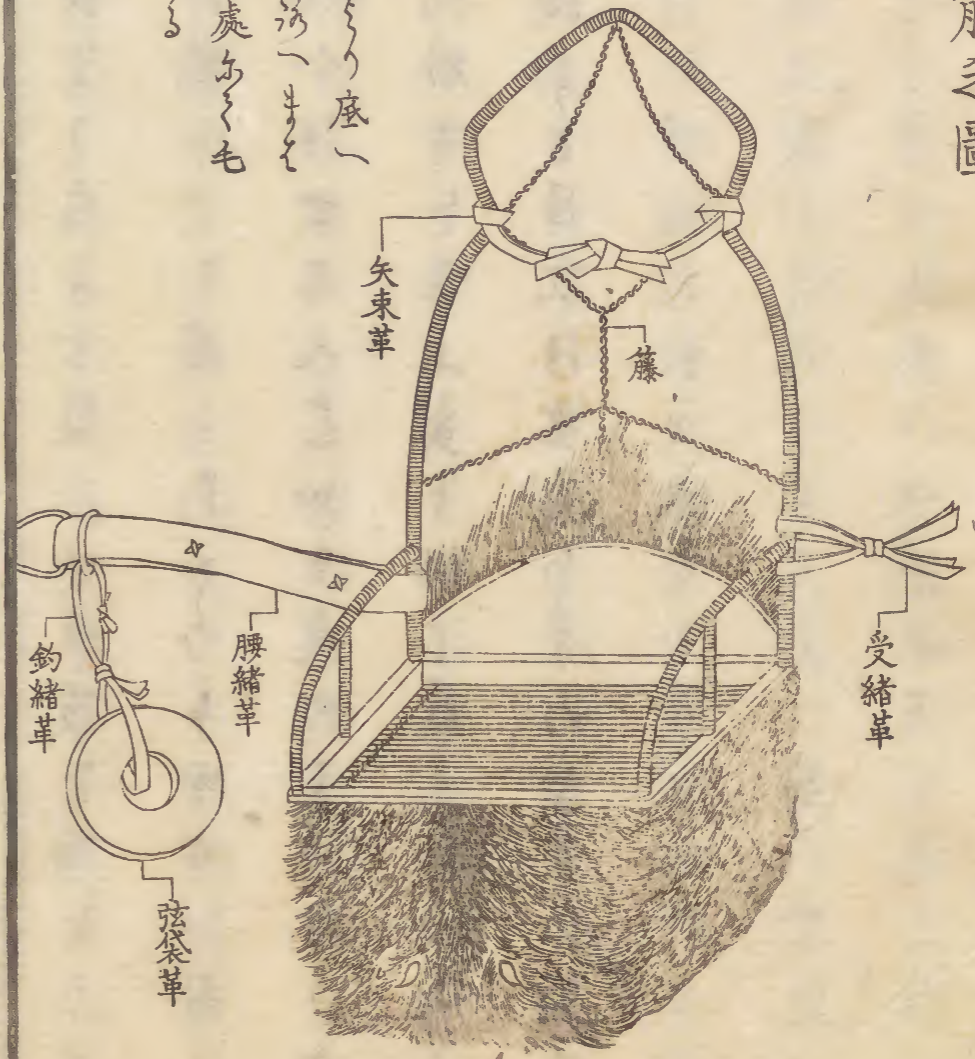
應神天皇み御代より毎年亥月亥の日を祝し
 給ひ御吉例として永く御玄猪み供御調貢と
 なる詔ありて代に神帝へ變らば三の亥と
 なる捧奉れなりをいへて其御例今の世に至り
 てかゝる攝津國能勢郡木代村切畑村より毎
 年十月亥此日の前日未の刻より禁裏へ御玄猪
 此齋を調貢し奉る是猪を賞とふる古義あり
 籠と鎌倉殿み代の始免の頃ゆゑの大將より士
 り至るゆゑ皆籠を負ひより鎌倉殿み代より珠

此器を重んじし將軍家の御籠を御調度
 と稱せしむる籠は大将の外猥ふ是を負ふは士
 と憚りし皆尻籠に負ひしり尻籠ハ籠の畧製か
 古代の籠ハ懸緒腰緒矢束弦袋等皆仕附ふ
 て墨紙と油紙と包みし小硯と共ふ根の矢の後
 小立置と申すなり故に矢立此名遺る浮田一
蕙藏と
矢立小硯の
圖左に見ゆ如是古製の急用と便利と見たり
 古人其器を製するは用ひ試みて其利用を考
 へ多製し多るを考ふは古製ある一定の法式

形は是古義なり左に古製の逆頰籠を圖せり其
 次は上緒の懸やうを圖せりその中古に製し
 して鹿苑院
殿乃代今世の人若知る處のそれなり古
 製と其便利勝劣を考ふは但し籠といふは
 其製作を考ふと目方其重くありぬやうに製と
 へたる事

サカ
ツラ
逆頰籠之圖

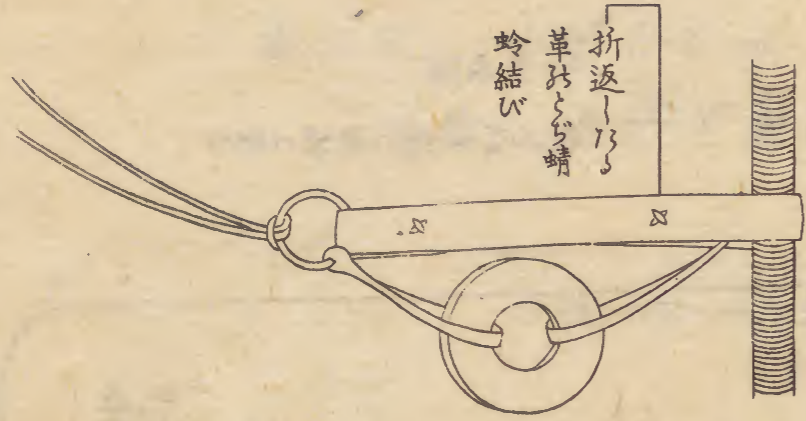
猪舩頰皮前より底へ
海りうう〜海〜もよこ
アア山形の處あり毛
うね逆入る



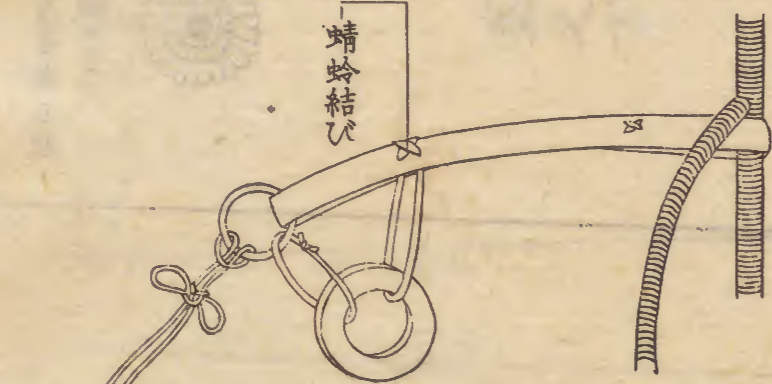
日本古義四八

弦袋如此附あるもろ

折返し
革みとら蜻
蛉結び

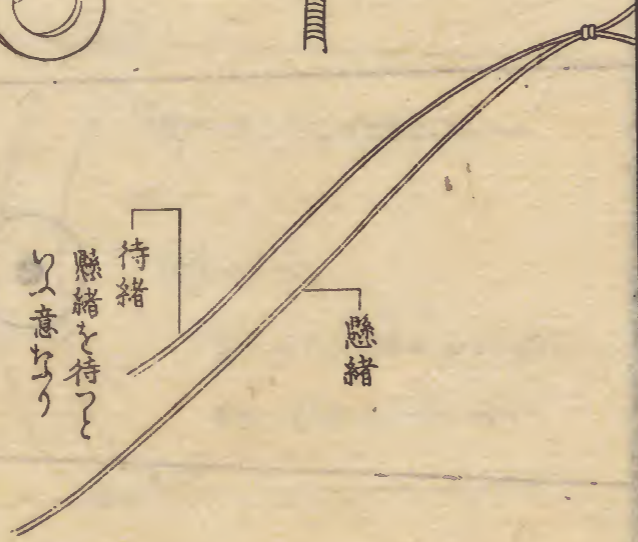


蜻蛉結び



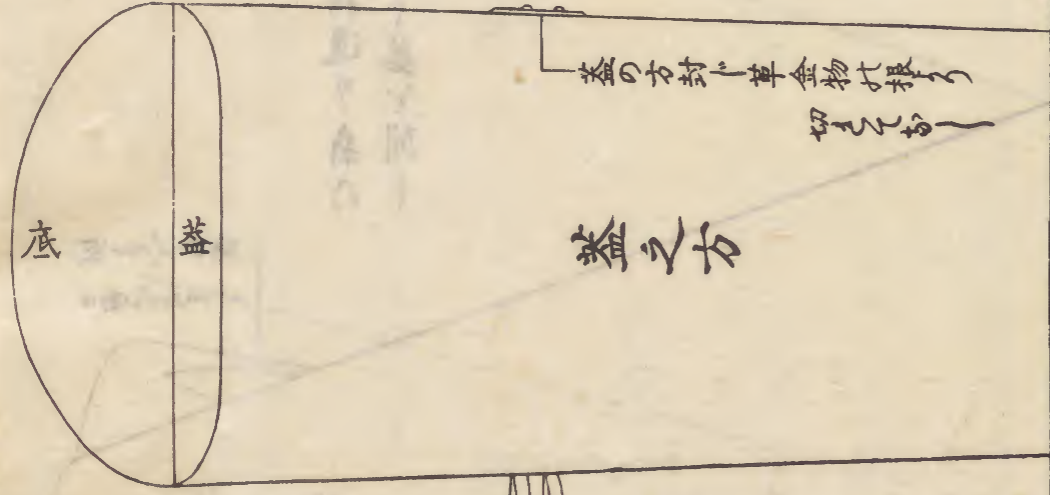
待緒
懸緒を持つ
り意なり

懸緒



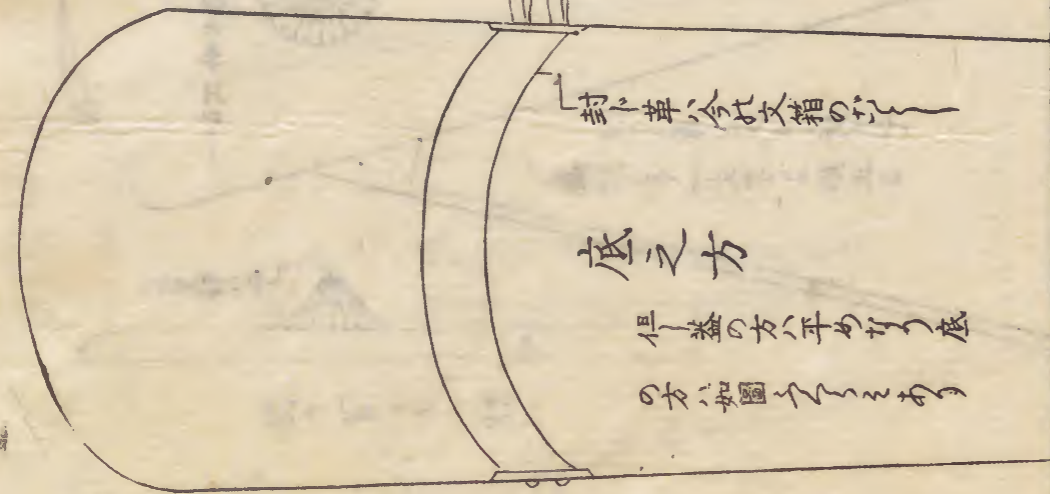
繪所預 土佐守門生

皇都 浮田一蕙藏



蓋之方

蓋の方封ト革金物ヲ振ラウ
切トスル



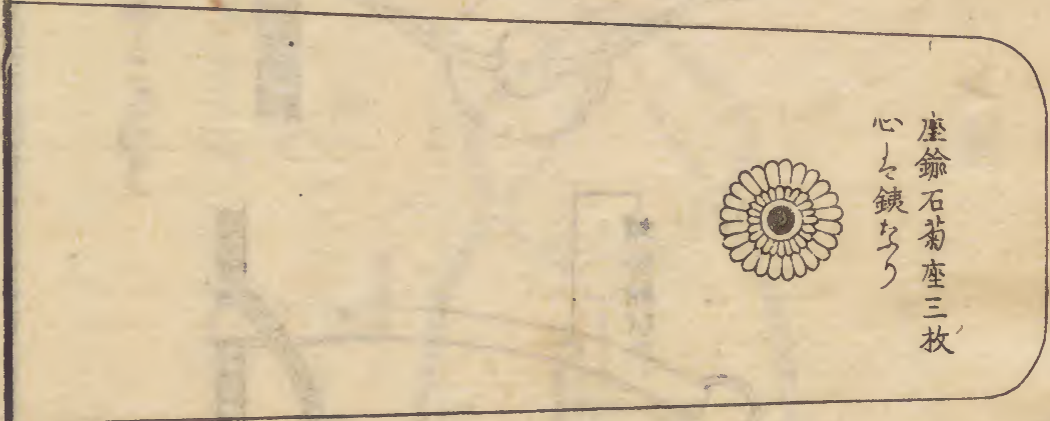
底之方

但蓋の方ハ平メナラウ底
の方ハ如圖トスル

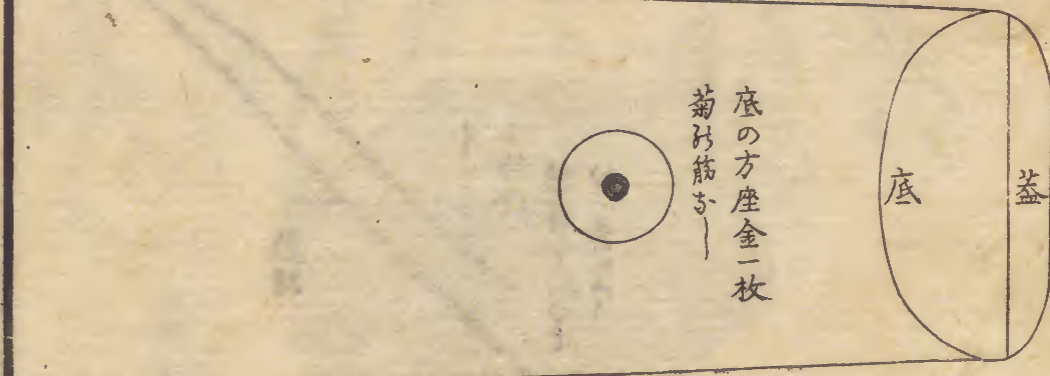
矢立小硯之圖

寸法如圖

檜ト以テ造リ瀧漆ト塗ル

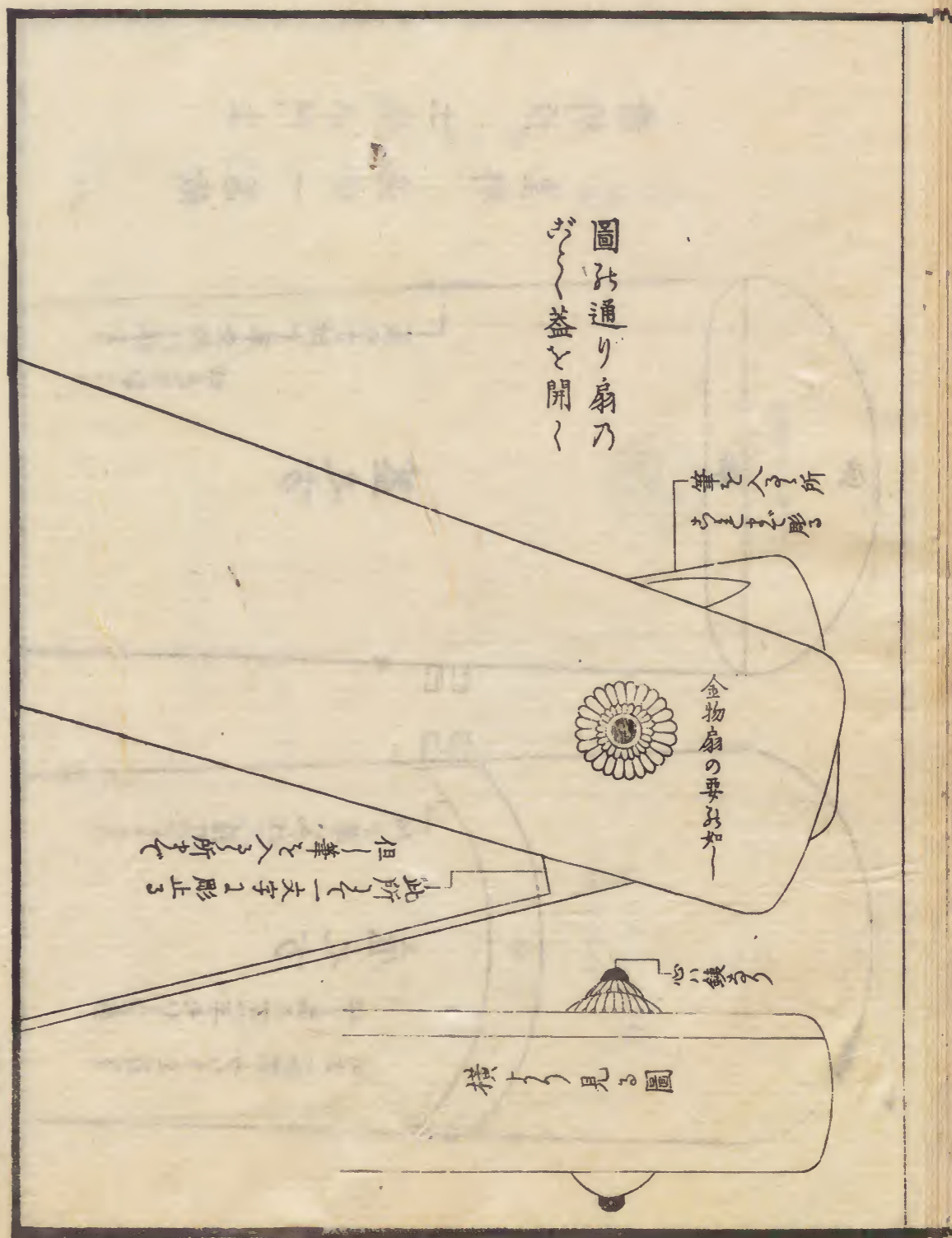


座鑰石菊座三枚
心ト鍍ナラウ



底の方座金一枚
菊形筋ナ

圖は通り扇の
ぐく蓋を開く



筆を入る所
ふまひ彫る

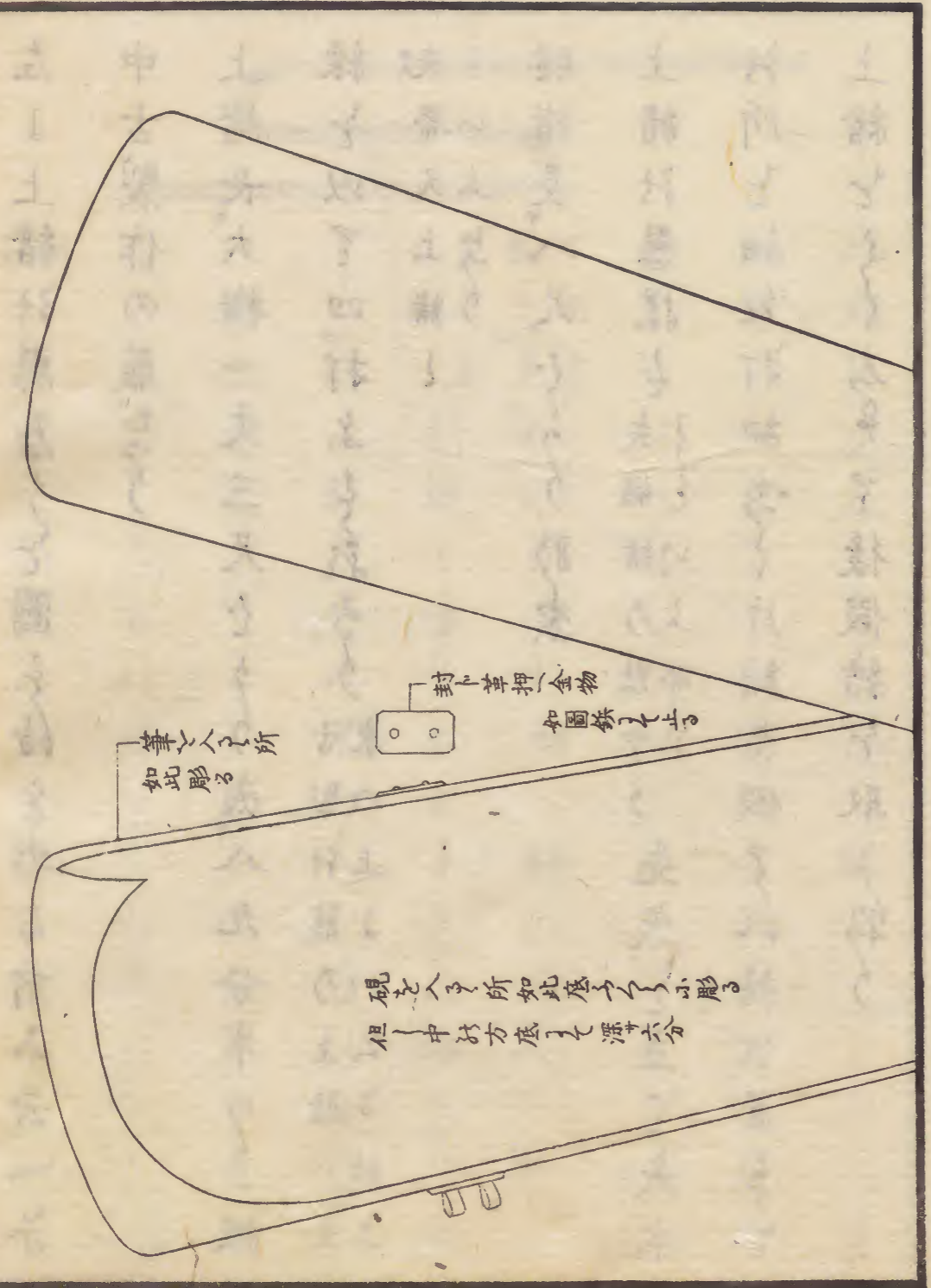
金物扇の要み知

此所へ一文字彫止る
但一筆を入る所を

骨に鐵釘

横より見る圖

日本古義四十一



筆を入る所
如此彫る

封じ草押(金物)

如圖鉄にて止る

硯を入る所如此底より彫る
但一中は方底より深澤六分

表帯とり
名義

矢纏緒のか
けやうこい
上事

左より上緒を懸けんと圖を依りて前ふ云へ
中古製作の箠なり

上緒長大概一丈三尺をりり太八九分りり練

練を以て四打ふとれりり古製の箠乃上緒ハ矢

表帯又上緒と
もいふなり

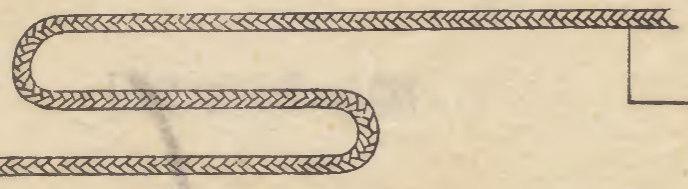
腰緒長八尺をりり形

上緒を懸けんと矢纏緒乃懸やう先矢を立て矢束

を所と細れ打紐ふり片結し假りに結び置りり

上緒をりり後假結を取らりり

日本書紀四十一



此端を一尺をりり長く取るべし左に肩

を懸る方なりり如圖折り此中程を箠乃

矢束の所へ前より押當箠乃後折目

を兩方よりり兩方ハ輪緒の端を右ハ左

の輪ハ右引通しゆり合せト指ふ矢

を締るなりり如此束ゆを箠表より

ハ緒三筋裏よりり二筋見ゆりり切

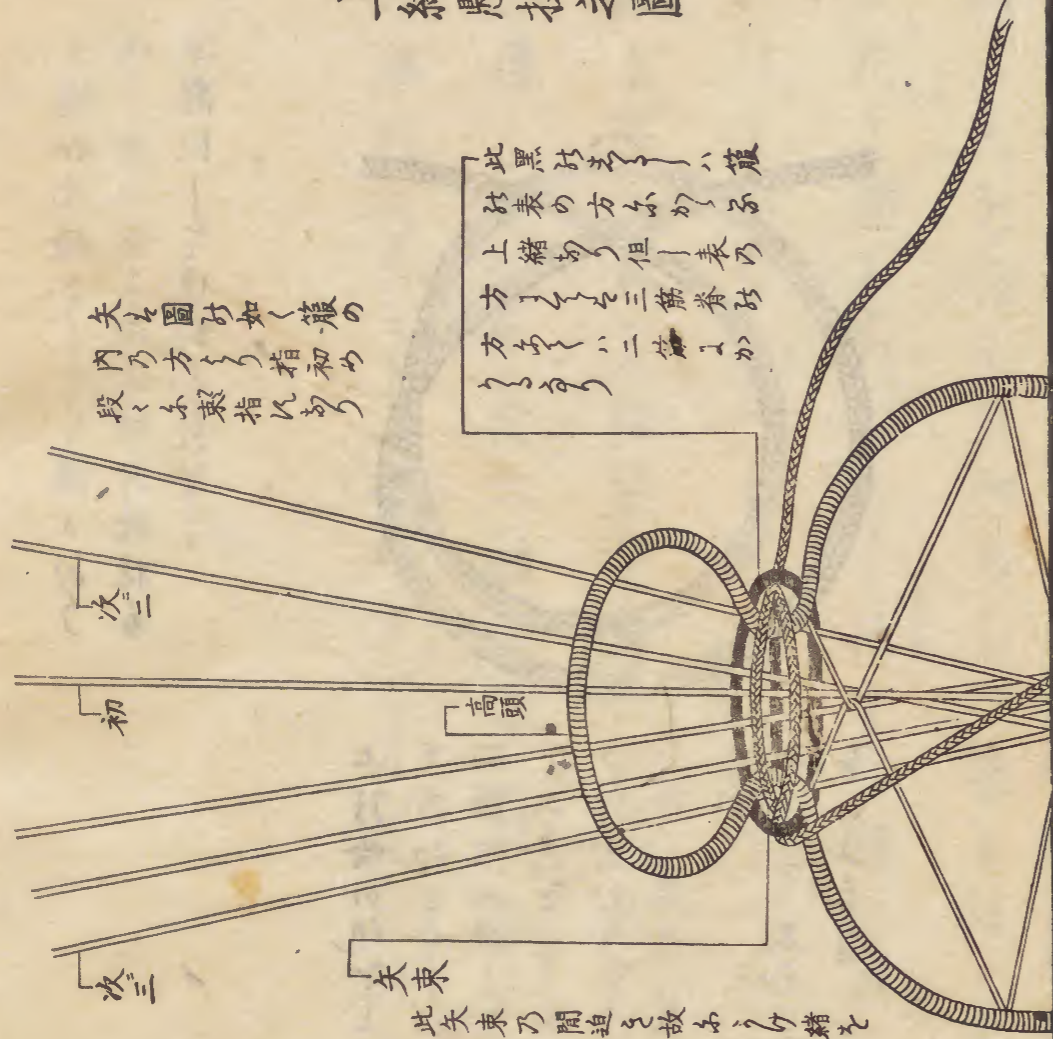
箠亦向へりり右方ハ緒を左の圖に如く

向へりり左方の高欄ハ堅金物より通し置りり

上緒懸搦之圖

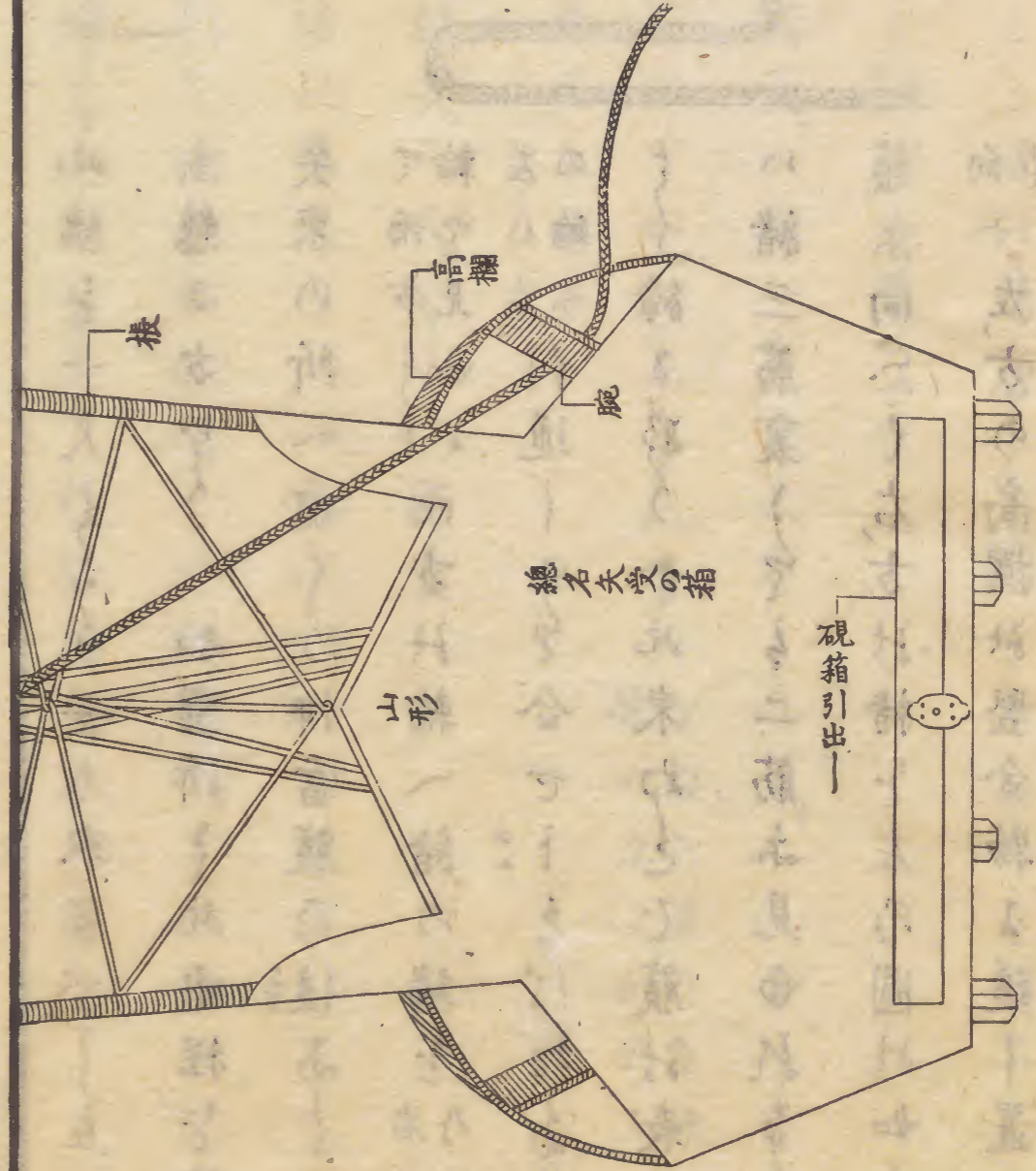
矢と圖け如く簾の
内の方より指初め
段々糸指れり

此黒はさへハ簾
は表の方ふかふ
上緒あり但し表の
方より三筋脊は
方よりハ二筋よか
るなり



矢束

此矢束乃間道と故ふりし緒を
食むる意りや此所を革
より少し巻れり故を淺く
し緒をくひり



上緒如此輪^りしても懸^るあり
但^し前^の小^の圖^を上^に緒^を懸^け搦^を
早懸^にして便利^{なり}

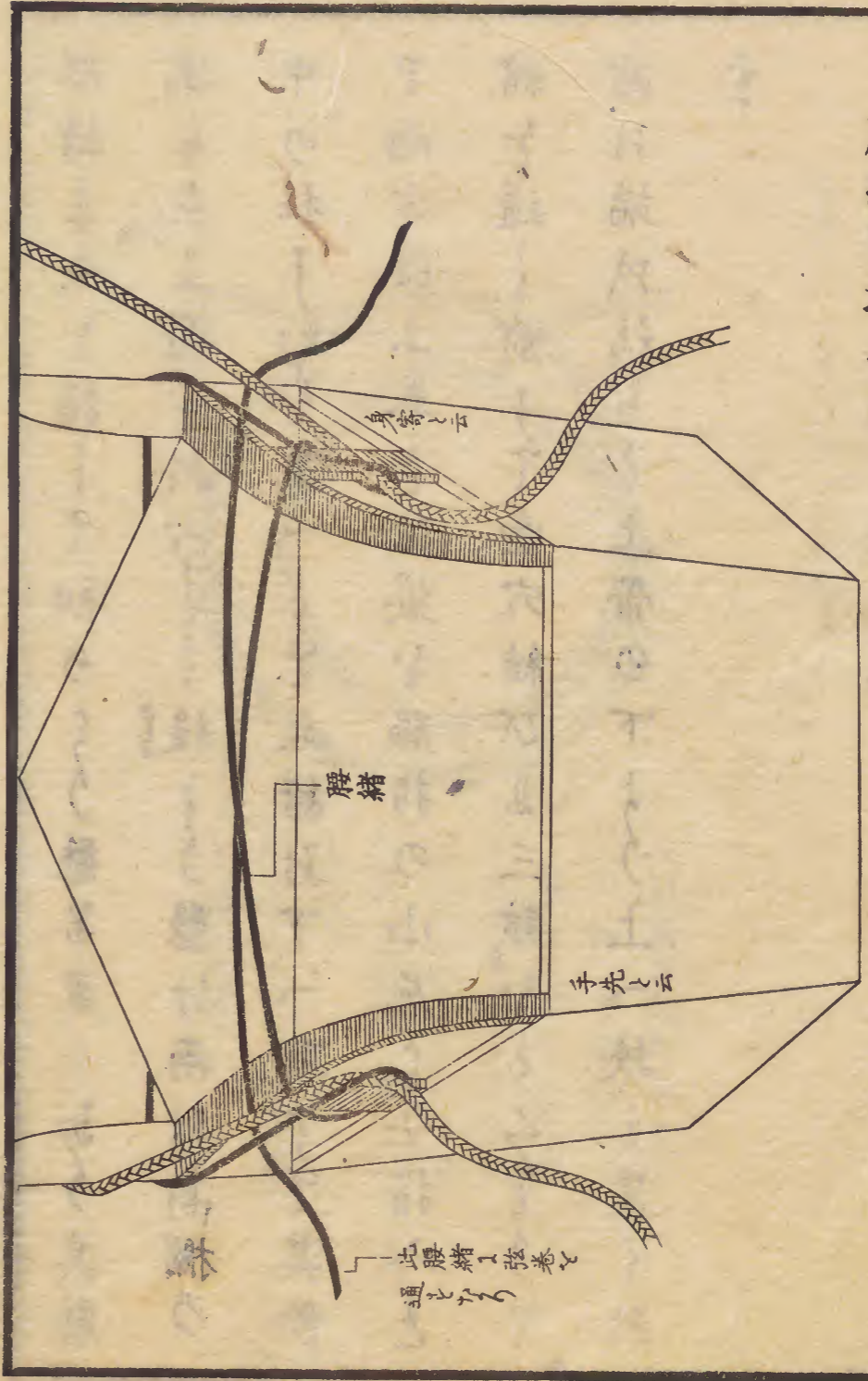


上^の輪^の印^を上^{より}
下^の印^を合^をれ^を上^に
二^筋下^三筋^とある^が
上^の筋^をと^り去^る
う^け去^るる^が尤^緒
ハ^前三^筋後^二筋^とあ^る
を^りす^る
但^しく^り去^るハ^矢束^を
を^りす^る

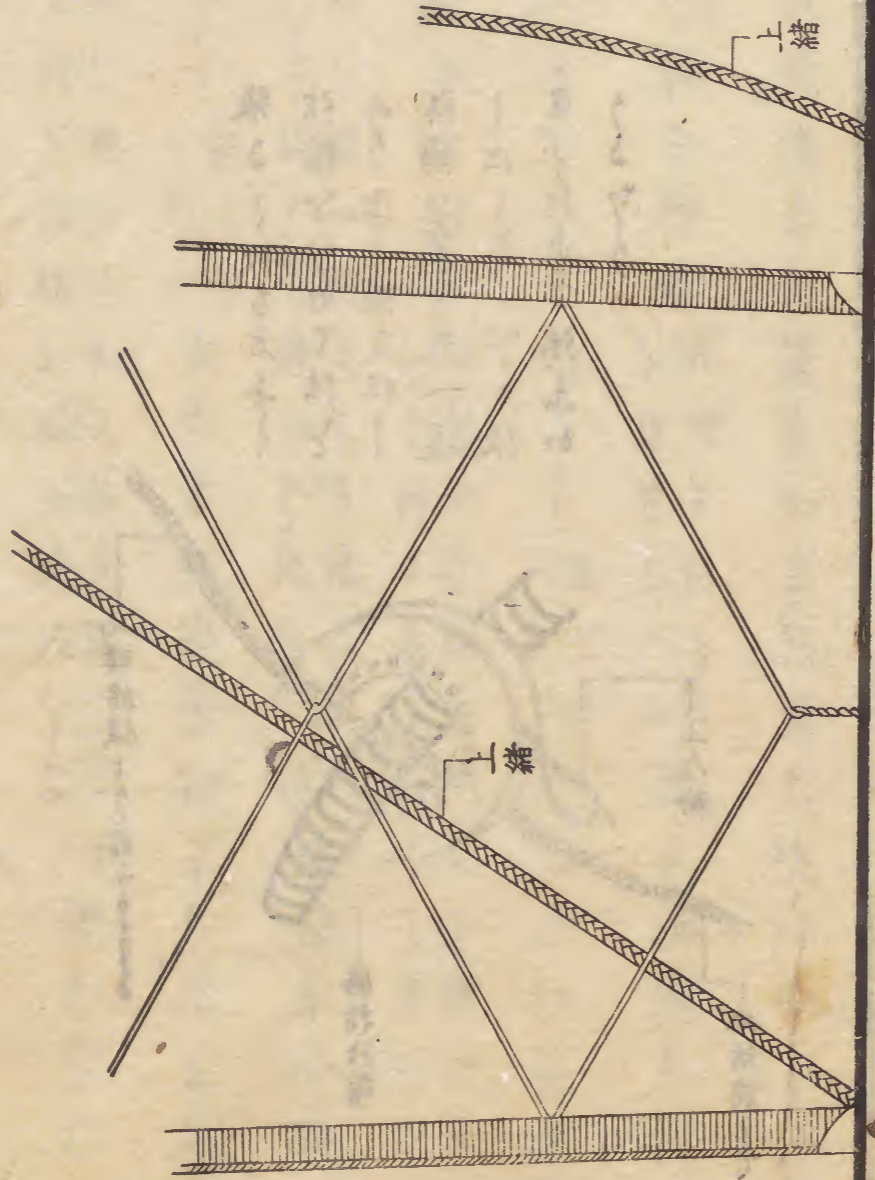
腰緒懸^{やう}
の事

腰緒^を矢^を指^して初^めく^り懸^を置^くあり其懸^を
搦^を左^の圖^をと^れぶ^く後^{より}懸^け兩^筋高^欄乃^は
中^の柱^をか^を上^へと^り又^緒懸^け下^へ取^りて其^餘
を^兩方^腰ふ^巻と^弦袋^を脇^指の^小尻^を指^入を^す
緒^を通^し前^をて^壺穴^結び^ぬ三^鎖か^とく^をり^て
緒^の端^を袋^の上^帯の^下より^上へ^挟え^置く^が
事

腰緒懸搯之圖

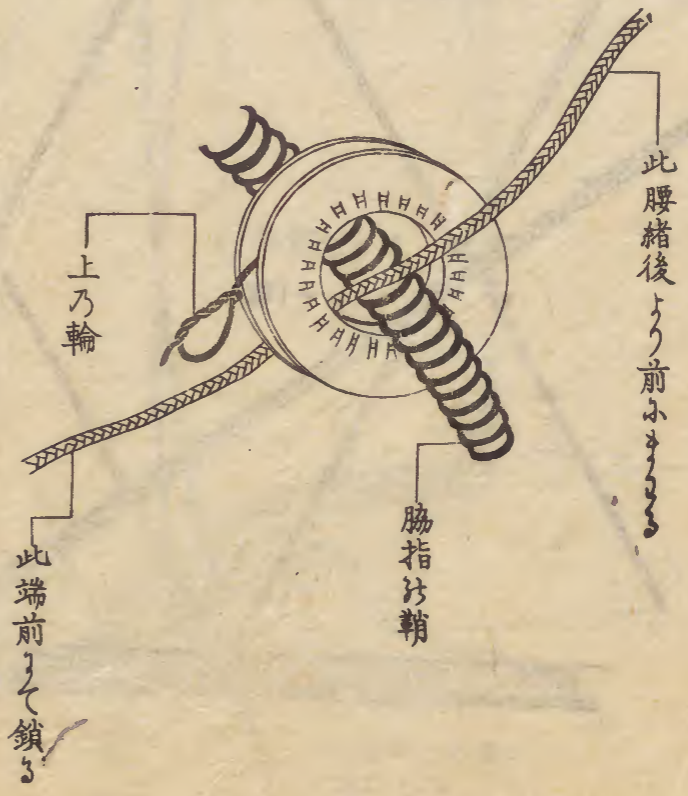


日本古義四十四



弦巻附様之圖

張るゝれも右あゝ
 弦輪をかけて弦を
 ろり出し張る但し
 弦輪ハ裏を表へ返
 し出し置くべし張
 るゝれ直し殊ふか
 うゝやう



箠負様比事

箠骨
 本義

箠は負様と矢籠負い多れ意尔後一少しをびり
 右の脇より押當此附るはあり圖と通し緒を
 左の肩を前へ越箠は向右の方此高爛乃豎
 金物よか此懸やう緒を假し小緒の末を引
 けを解るゝに置けを片方
 此緒を後へ廻手とれたら切最初尔金物を通
 半箠は向左の方此豎金物より出多れ緒は
 腰緒を懸るとれと右の圖と如背より左の脇
 く上緒を腰緒の輪に通なを腰の物此下と廻し前へ取し左の肩を越して
 金物を通し多れ緒の末を兩方乃緒を一尔左

眞矢といふ事

負征矢といふ事

内を用ゆる所を此内より表指二本あるなり御所
平胡籙あるは表指鳴鏑二本指ひたり御隨身は尤
壺胡籙は上指鳴鏑一本あり此差別あり
鏑を指次時と鋒矢をば指さば孰も外向内向二
本あり又鏑矢と眞矢といふ墓股を鏑乃か
るに指次時と是を眞の矢と云ふなり上矢を
手先の方を雙べて指を折り大將を主の負征矢
負征矢とは籙矢籠に指ひ矢なり射捨乃をむご
征矢あり也ふ負征矢と別云ふありをむご
と射捨るをふありはむごを矢数十六より二十
本に過ぐべうに負征矢多く指して利かき

日本書紀四十七

籙矢と殘
れといふ本
義

用前乃矢指
やうに本義

ツミ指とい
ふ本義

飾置く籙矢
矢指様の事

いふ運命盡す討死を新やも籙矢を殘次との
なりといふ一子を死を惜まざるの聞えあり
用前時時の征矢の指をうら前上緒懸やうに
處に圖を添如く矢を一束立るなり一束立
る二本三本は組違へ籙の内は方へせしめ
る根乃方開ぬるなりて手懸しれやうふ
根配りハ指をべし尤上指二本は手先角矢指
とけり是をけし指といふは積重は
指ひといふ義なり束指
常ふ飾を置く時矢の指やうを左に圖とる如

鞭を紙捲
て結付る事

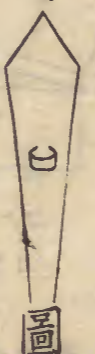
く矢配を入き征矢砂内乃方身寄し揚枝陰劔
尻おどめ副矢より指初め多木鋒鋌矢形とを其
後征矢を二本三本併組り指納りしは
手先砂角り上指を指を好架但し鎗矢又と墓股
あも根を抜きて篋を矢配入き後根を
指をべし
鞭を取柄を箱内へ入き紙よりあも手先の方
砂蔓の有り結附置くあり騎馬の時と鞭を腕
かちる故に當分納先様形をさ事成見を紙

早吉義四十八

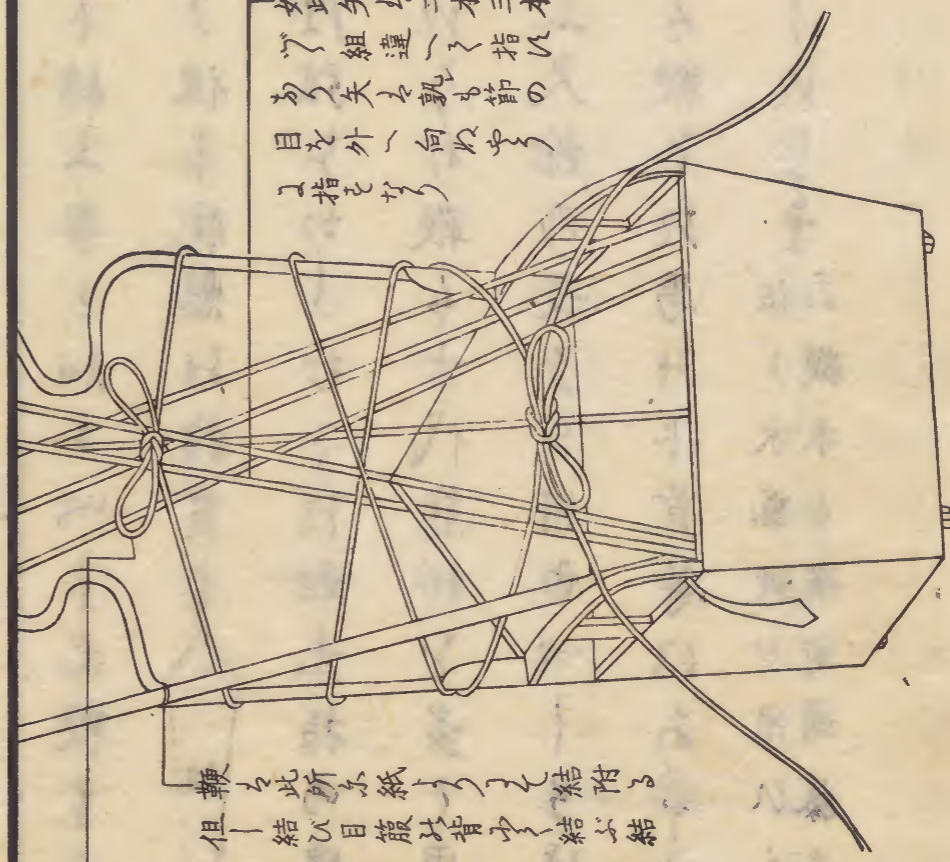
鞭は指貫の
事

鞭は製作

よるあも結ふ事と知るべし尤鞭を上緒の外
指を好り但し腕懸り指貫と
尔附るば弦をかむとれ劔先指の腹に障らば
してよれり鞭を古代熊柳を多く用ひあり但
し鞭を三尺餘の長さを用ゆべし弓弦引込む時
短き鞭を鞭を馬に平首等にあたり或左一越
してあもれり
の佐木盛綱が用ひあり熊柳
の鞭木を備前國藤戸より今存
アセ



常糸飾置く時矢指搦の圖



如此矢と二本三本
づゝ組違へく指は
あり矢と孰も節の
目を外へ向けやう
こ指をさう

鞭と此所糸紙よりこ結附る
但一結び目箆背やう結ぶ結
目もも同ド

飾緒は輪一小紐を付け矢束の所一結附る
但一飾緒は上緒を用ひてよりかけやうに
定式ありやうある見よれやうこは
べー

副矢と高頭乃蔓糸
黒草を細く裁て結
附くべし副矢も二
十五矢の内あり十
六矢はくれも同ド

上指二本雙べて簾表
手先の方や指とあり上
指も二十五矢の内あり
十六矢のくれも同ド

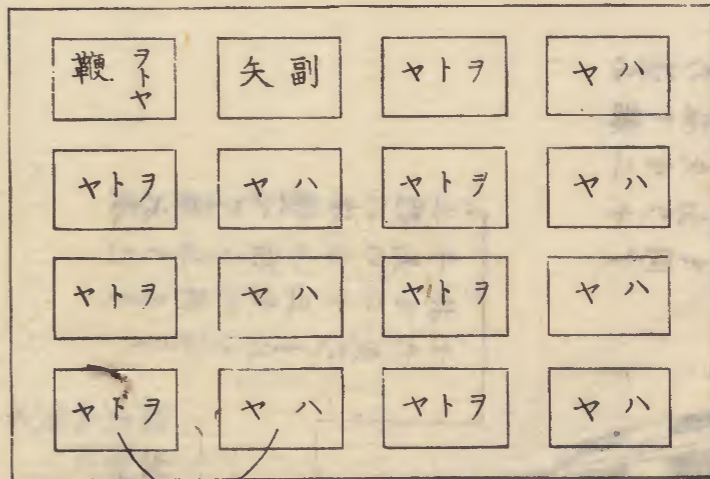
副矢此所
結付る

真征矢

鞭を矢と一所ありとせぬ故に
矢を一本扱て其跡へ指とべし

常ふ飾を置く時と此矢配を入る指をかり
 但し矢配を十六矢指と二十五矢指とを二枚
 製一置きておれり

十六矢



外向
 鋒矢
 内向

身寄 二十五矢

木鋒	類と指	右同	副矢	征矢	ヲトヤ
征矢	ヲトヤ	同	同	同	同
同	ハヤ	同	同	同	同
同	ヲトヤ	同	同	同	同
同	ハヤ	同	同	同	同

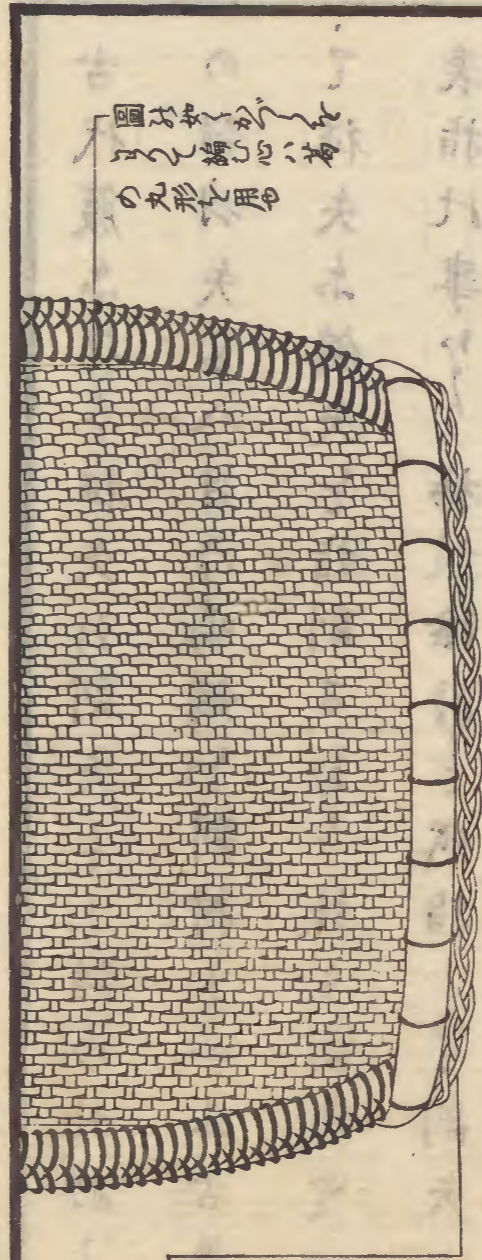
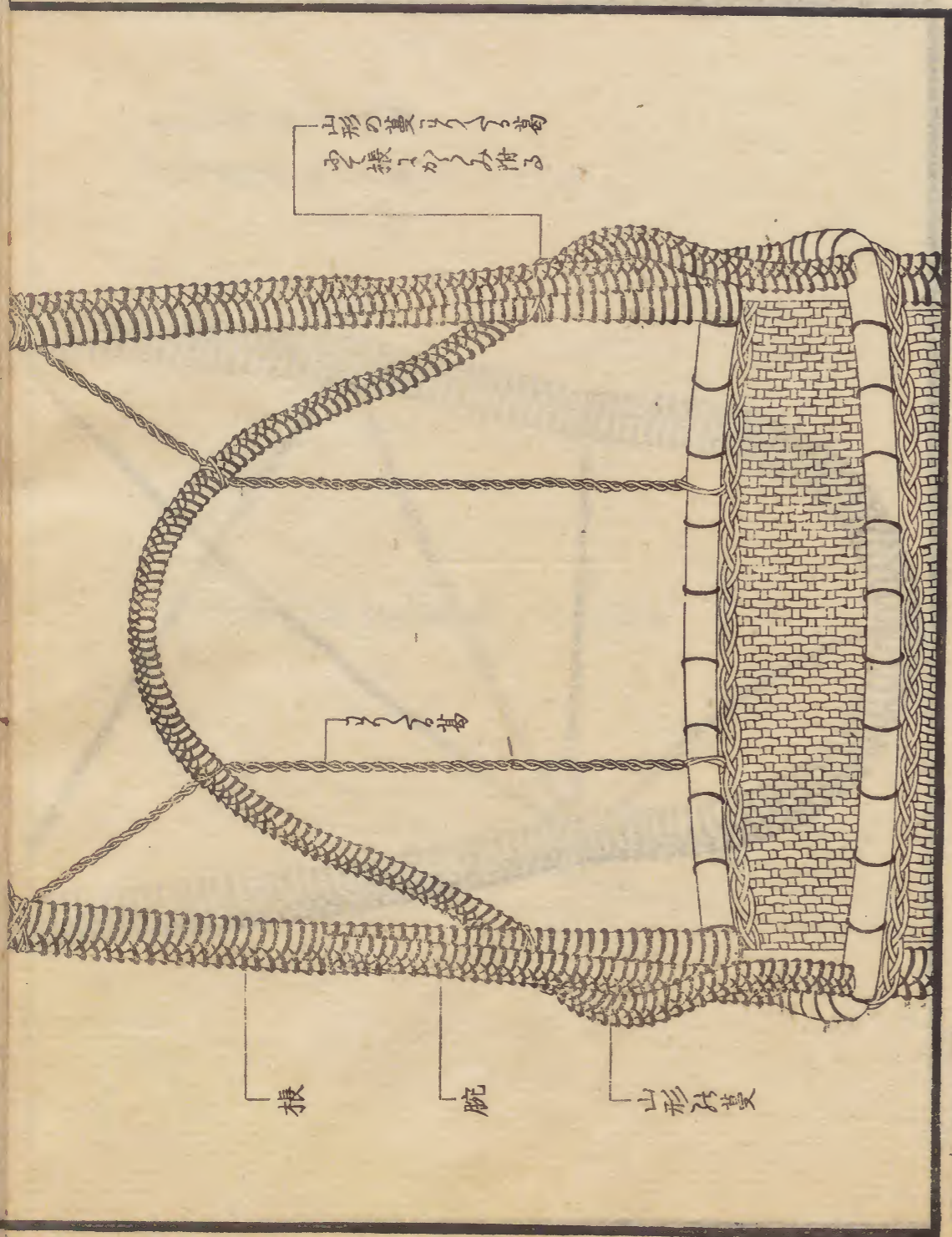
鏑矢又
 墓股を
 指は時
 ハ鋒矢
 と指と
 べ

日本古義四二十

副矢と事

中指と事

古代箴尔指と征矢は副矢と上指の外形は是天
 の羽羽矢は八目乃鳴鏑を副持といふ古義に據
 りて征矢は鏑矢を指副るあり故に副矢といふを
 表指此事なり楊枝陰形と城指して副矢といひ
 鋒矢を中指をいふ事と中古より其式鹿苑院に
 あり古義よりは上指といふに對して征矢を
 中指といふ形なり又鏑矢を陣中あり土居山岸に
 ても射付てて手力を試ふに用ひ木鋒と矢文或
 遠矢れど小用ゆれ多きは尻籠羽壺尔一手を指



御所御隨身

種大葛胡籬之圖

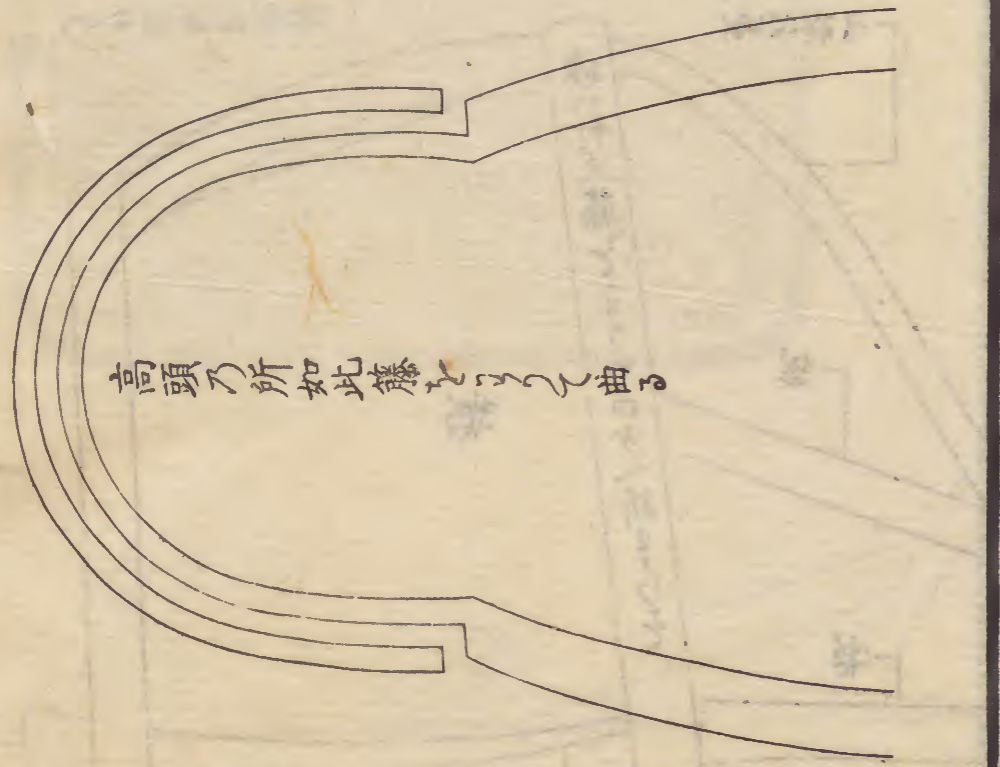
大如圖

黒葛真籬を以て造る

總金粉塗又黒塗も可

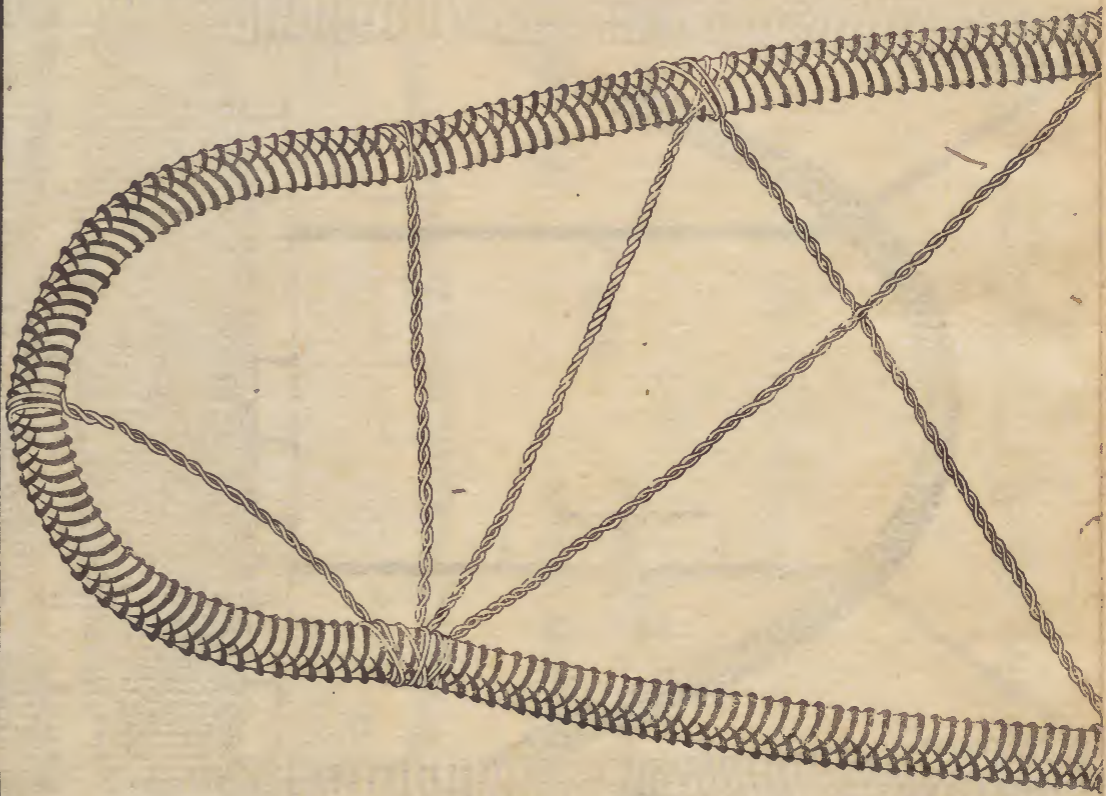
しづ嗜む矢ありといふも中古より形々々々
 中節より入給て入給て天幕軒中より王武山軒と
 なる

心と圖が如く丸籐を用也



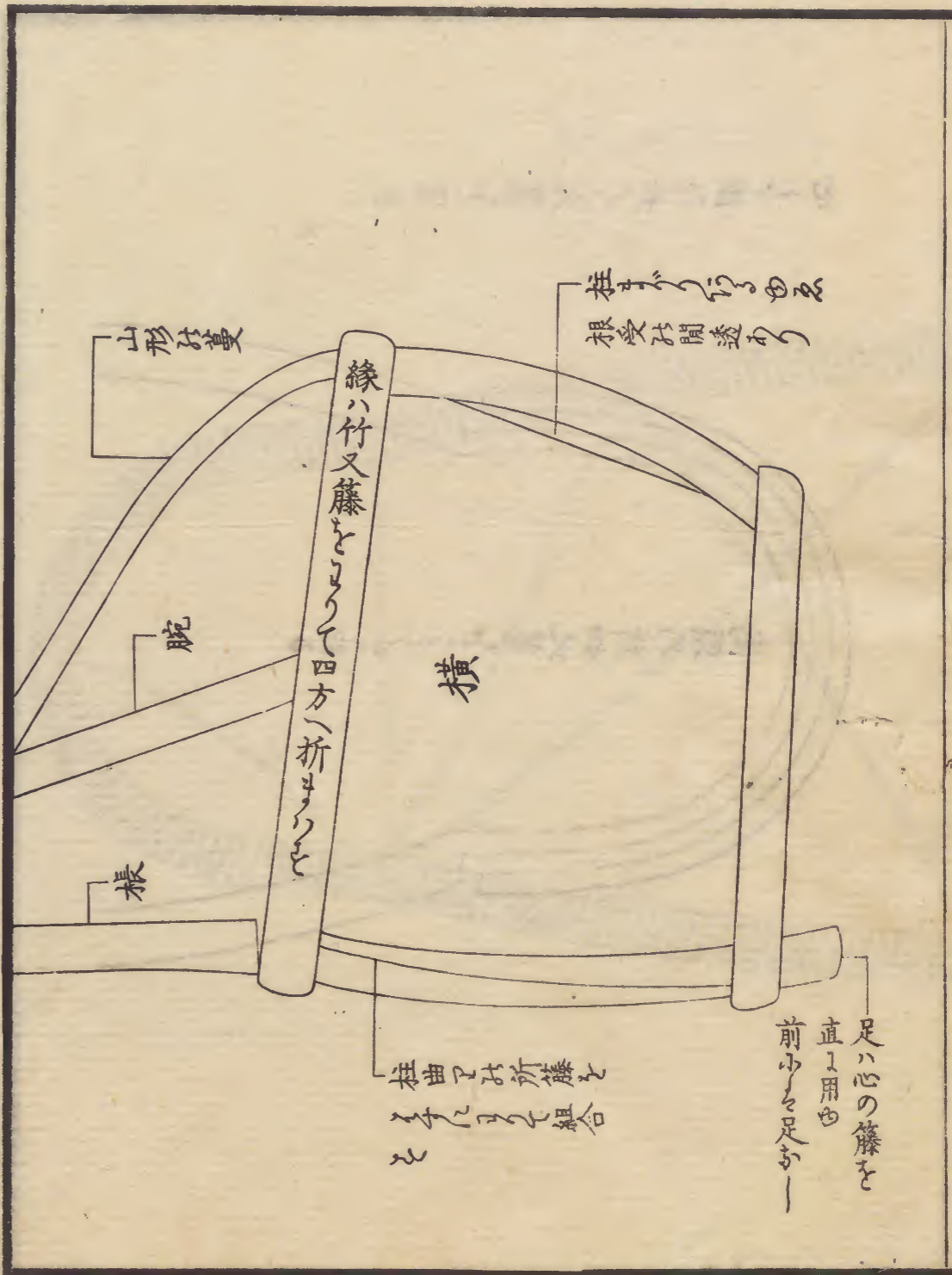
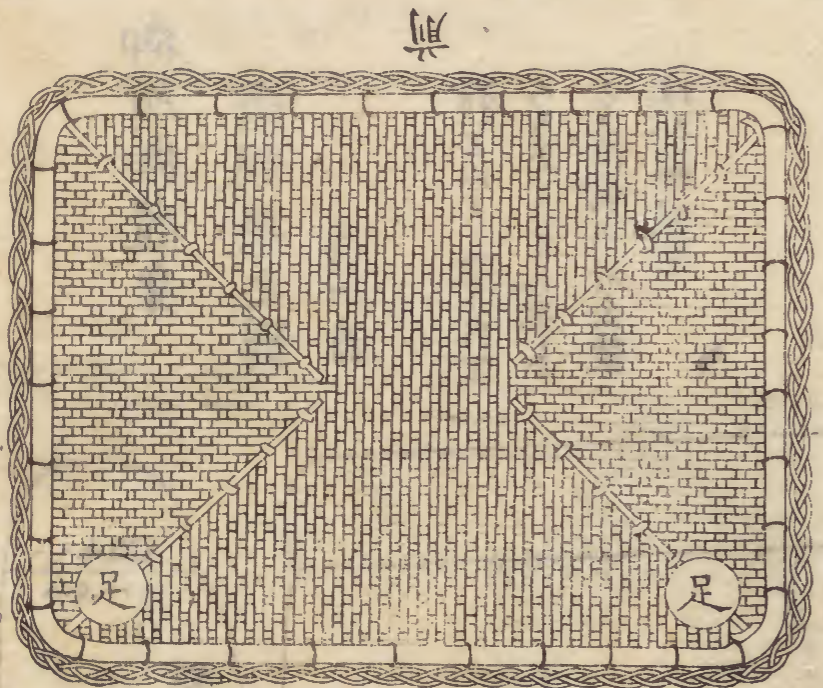
高頭乃所如此籐とてく曲る

振山形蔓腕の何と
かほくを以て組
邊一卷く



日本古義四乙士

同底之圖



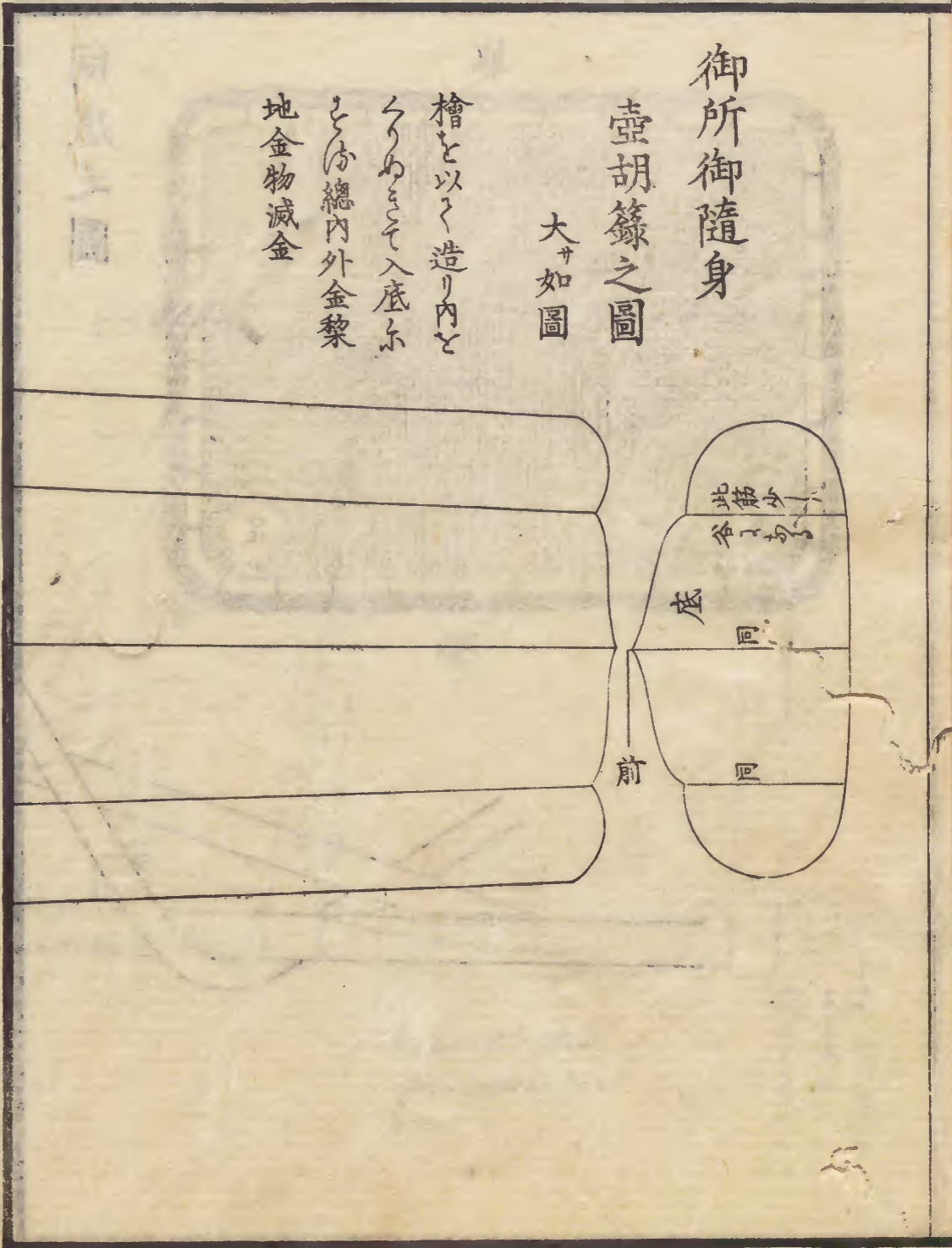
日本古義四之三

御所御隨身

壺胡籙之圖

大如圖

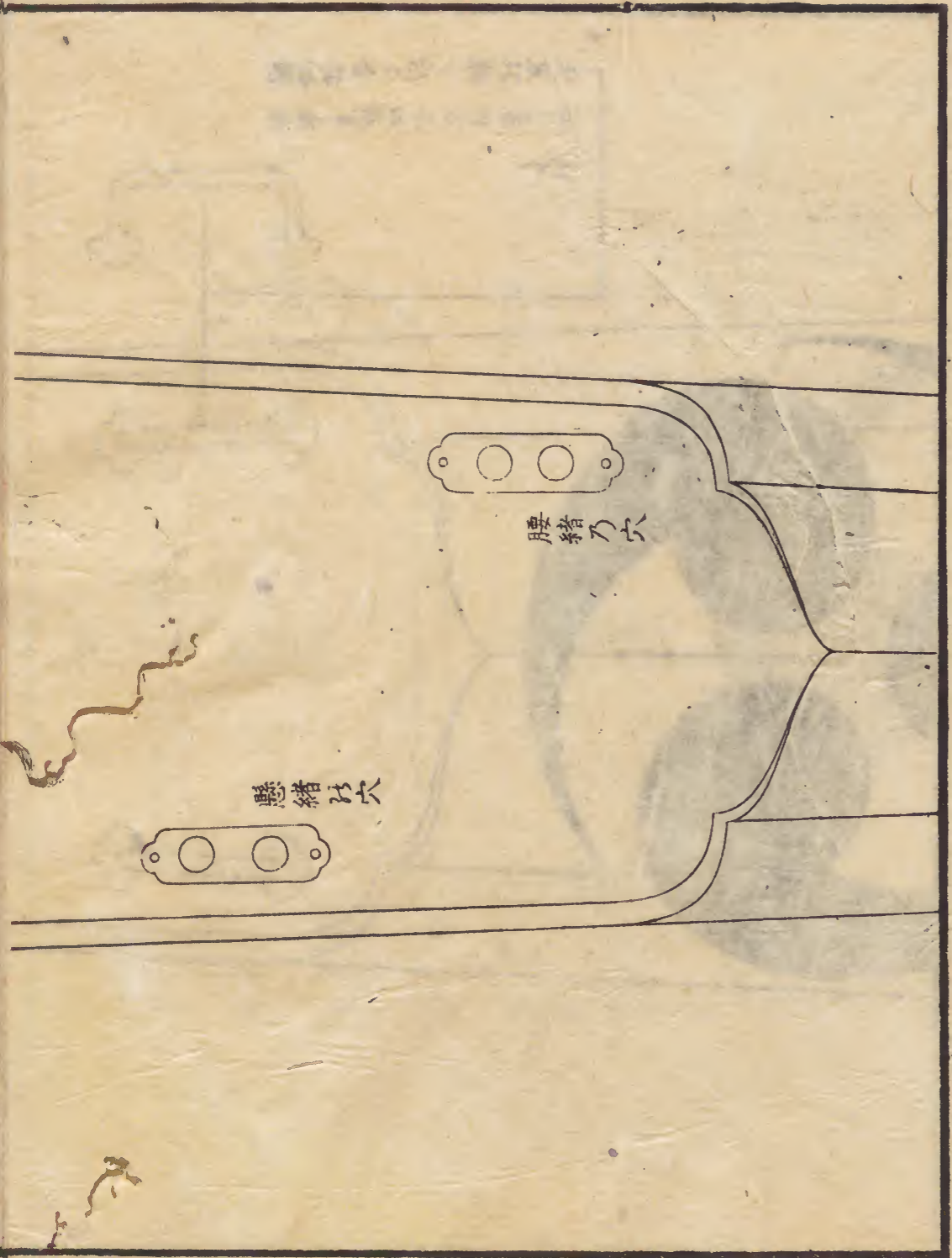
檜と以て造り内と
くわとて入底ふ
と亦總内外金梨
地金物減金



日本古義四之二十四

腰緒乃穴

懸緒は穴



東大寺

前
口形

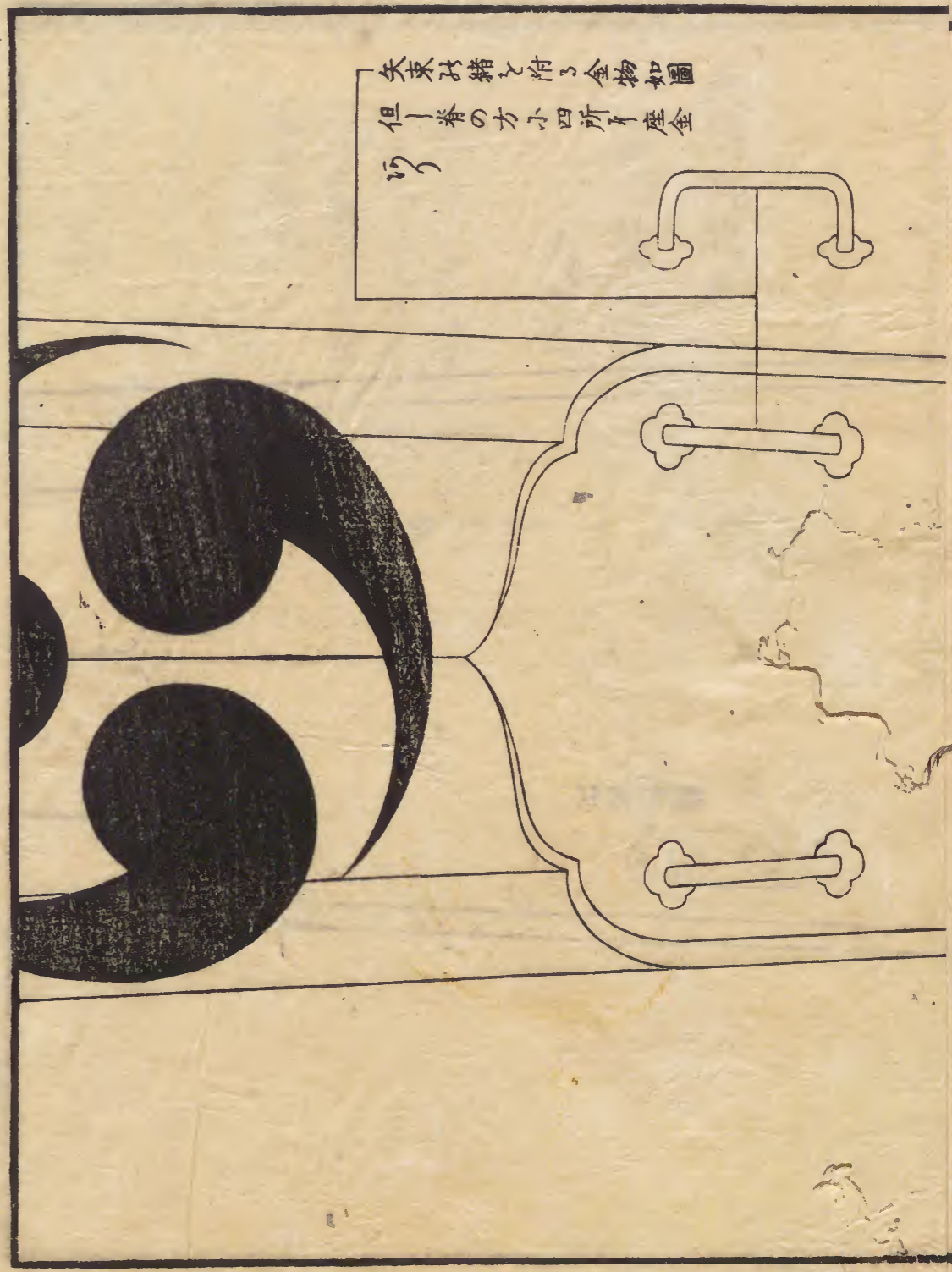
此筋谷

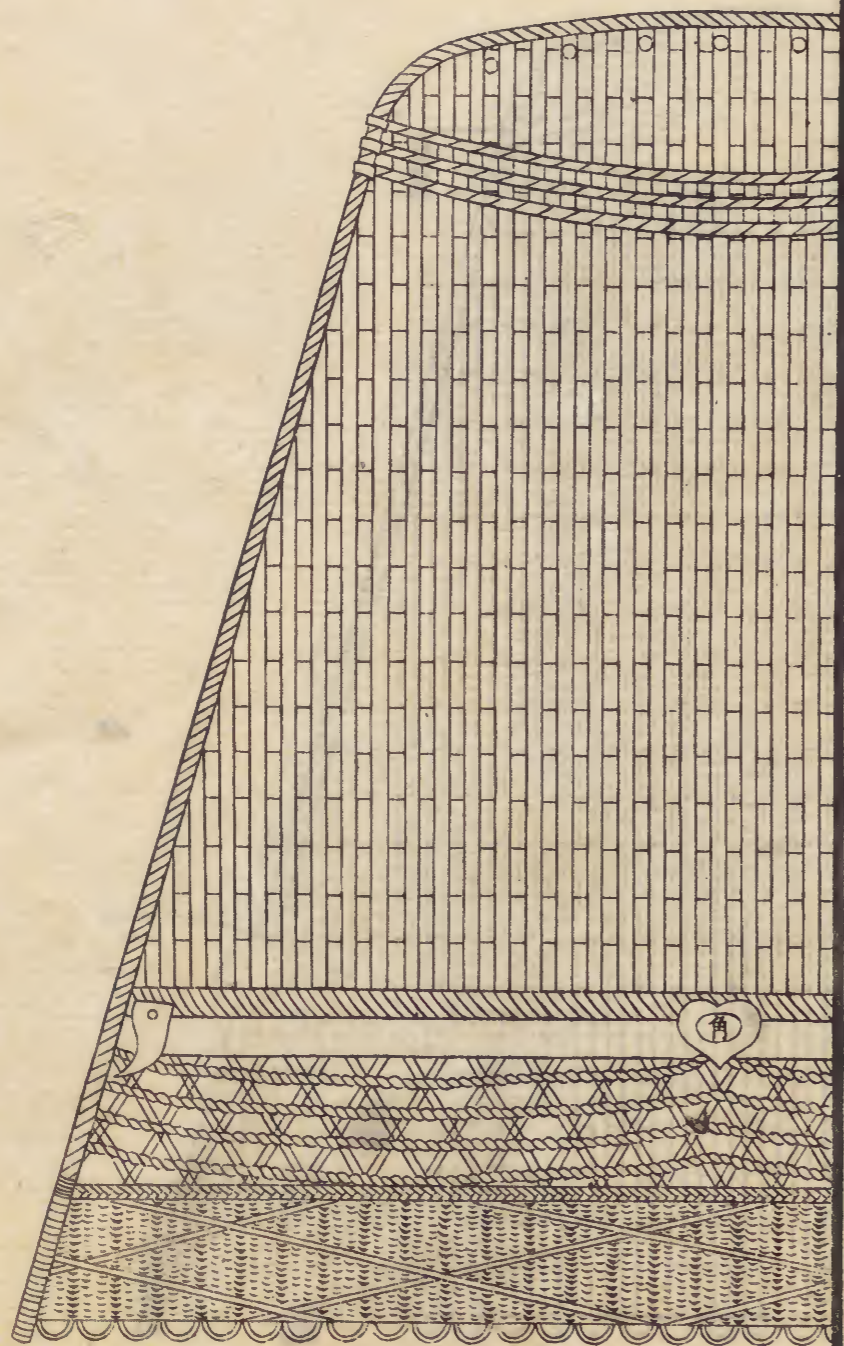
此筋山

此筋谷

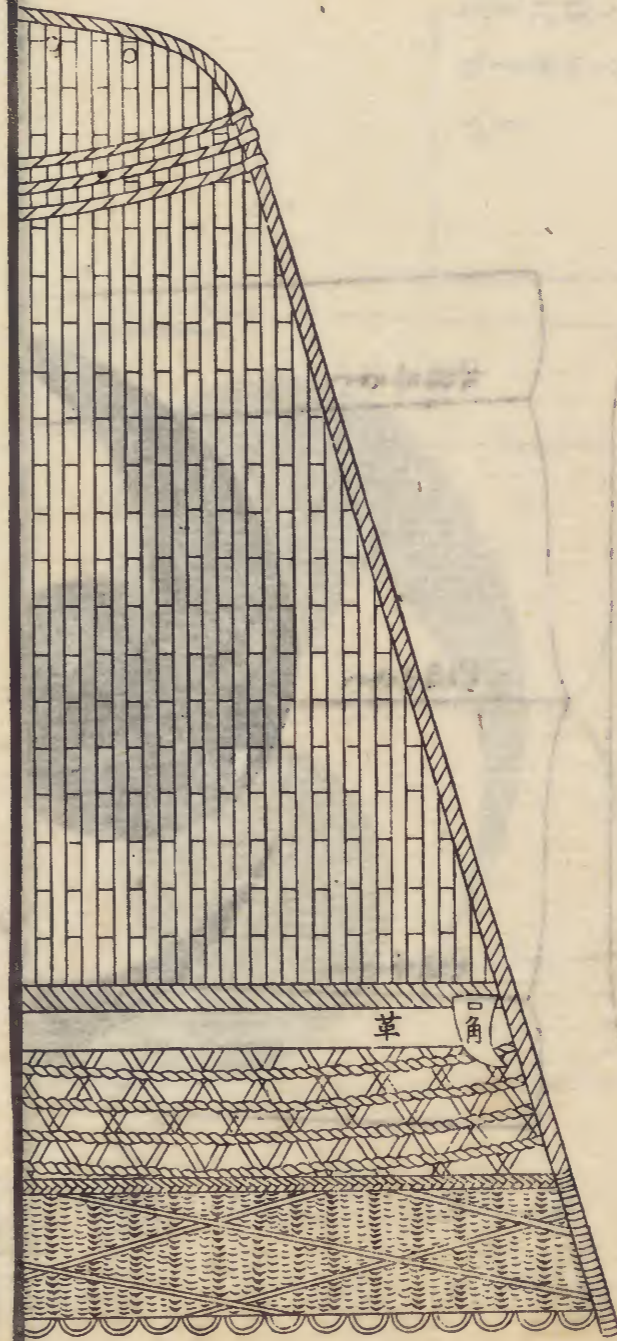
日本古義四二五

矢束み緒と附る金物如圖
但一脊の方小四所座金
可



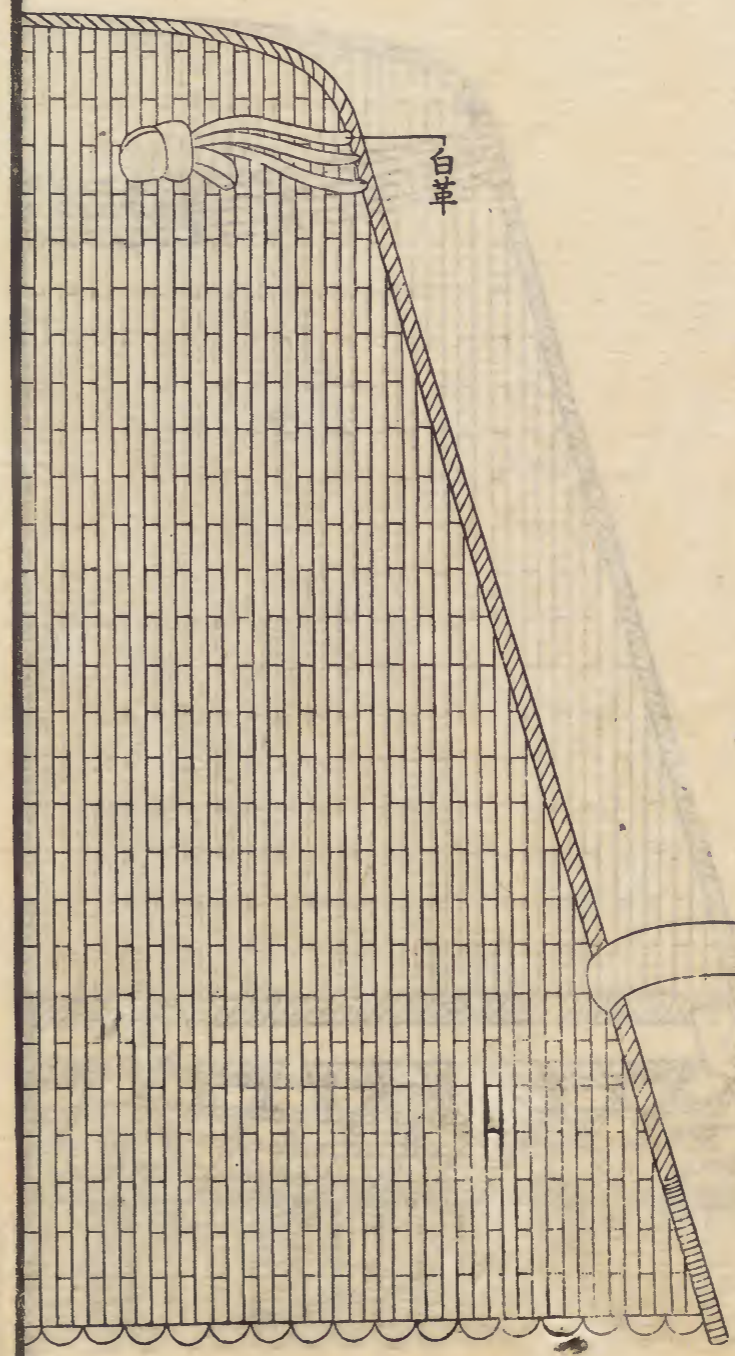


一尺六分



東大寺 倉
御鞍之圖

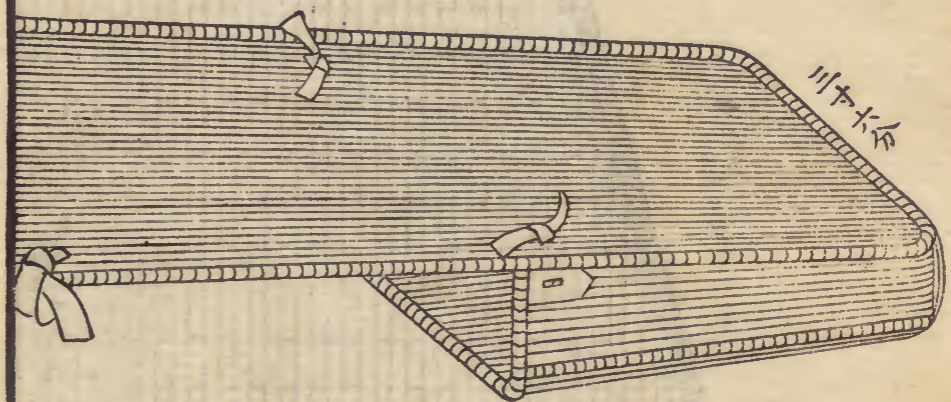
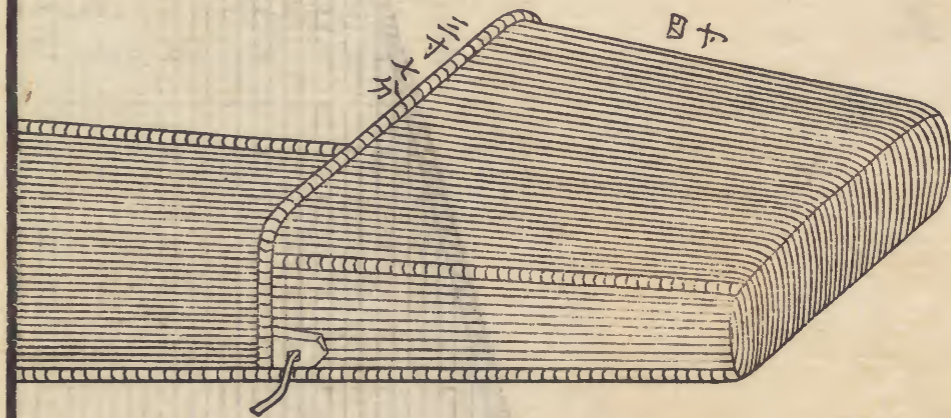
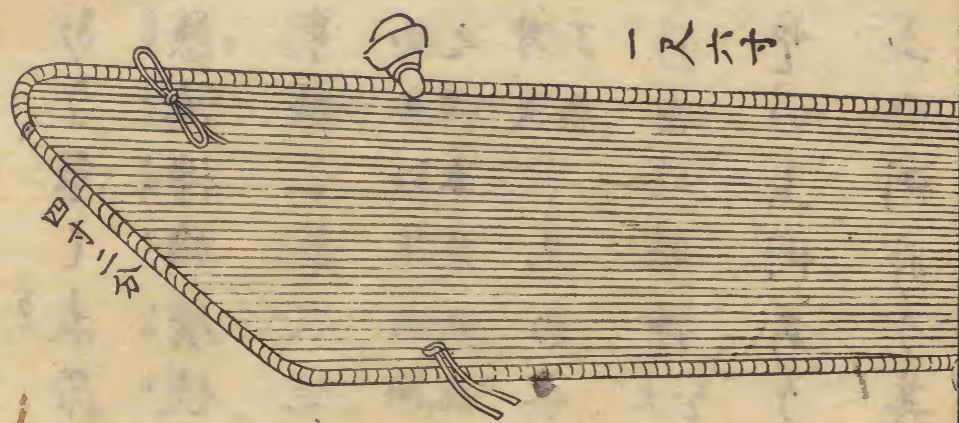
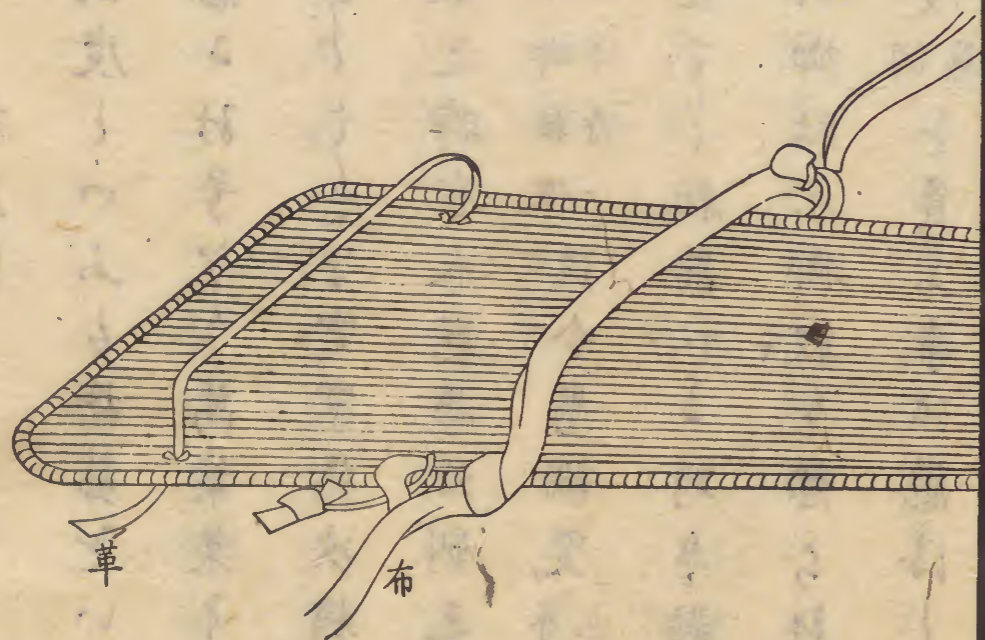
日本古義四二六



同裏

白草

日本古義四二七



同御胡籙之圖

日本古義四二三八

調度懸

調度といふは胡籥をいふあり懸は表帶を肩に
懸るは号なり萬葉集に鞞懸流伴雄廣伎大伴余
あはれえ定家卿次將裝束抄に著衣冠布衣供
奉之時布衣騎馬殊刷之時御幸以下執柄宇治入
公卿勅使或令懸調度也尋常野矢と見ゆ今に世に
相伴時 至るは勅勘の時を鞍馬の由岐明神を大己貴神
に御社に御鞞を懸らしむ例あり此等調
度籥を負ふ事代懸流といふの例なり其胡籥を

日本書紀四三九

負ひ弓と持も。隨身に役名も唱ふるあり御

禊行幸服飾部類康治元年十月廿六日字槐記に

云馬副十人瀧口一 二 騰 中畧瀧口調度懸十人

淺黃狩衣袴也俗呼曰權色黄色調度懸不狹尻刻礼胡籥如常負

但以表帶自左肩弦卷當胸結之弓右持以弦方為

表又壽永元信範記云御馬副十二人各具調度

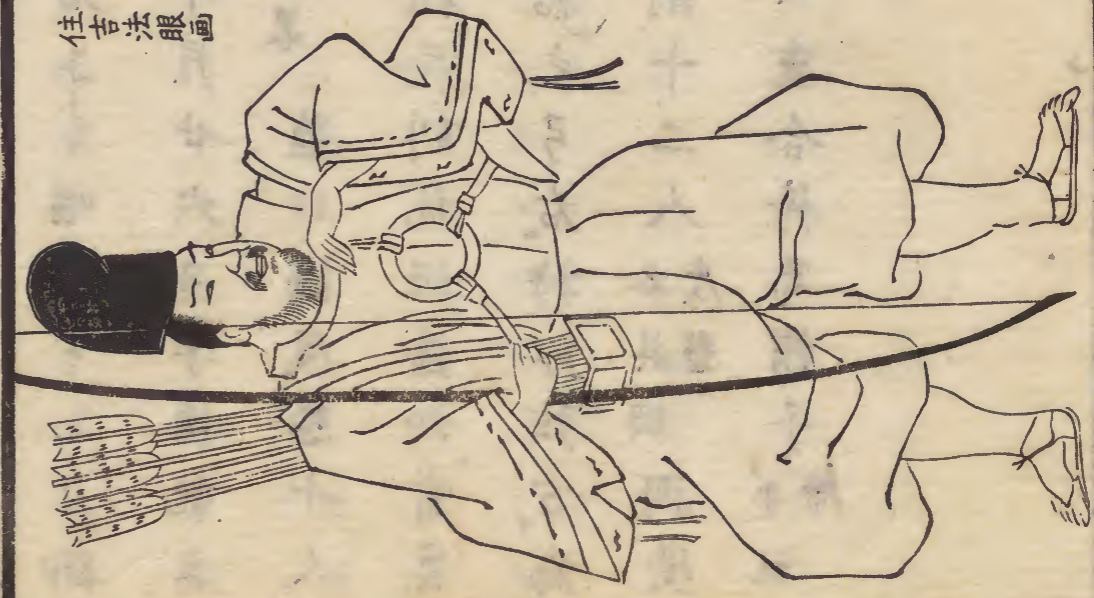
懸十二人淺黃狩衣袴黃袖一重合袴烏帽子平礼

藁沓と見えり

調度懸 高階隆兼画

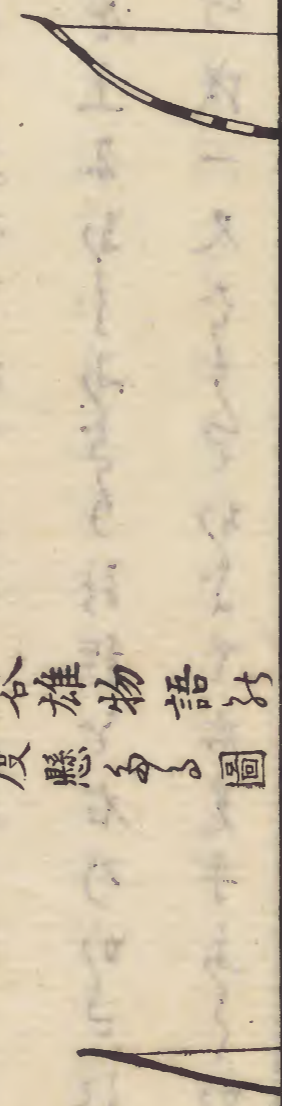


繪尔見也 住吉法眼画



日本古義四ノ三十

文永賀茂祭繪



紀長谷雄物語の 調度懸の圖

武家より調度懸といふ事を鎌倉殿に代り始
り將軍家の御籠を御調度と稱を侍り籠ハ將
軍家よりより負ハ給ふ重器亦志多第一に御
調度多をもて別々御籠に御調度也稱と致お
り將軍みげより負らせ給ハごはとれを弓馬

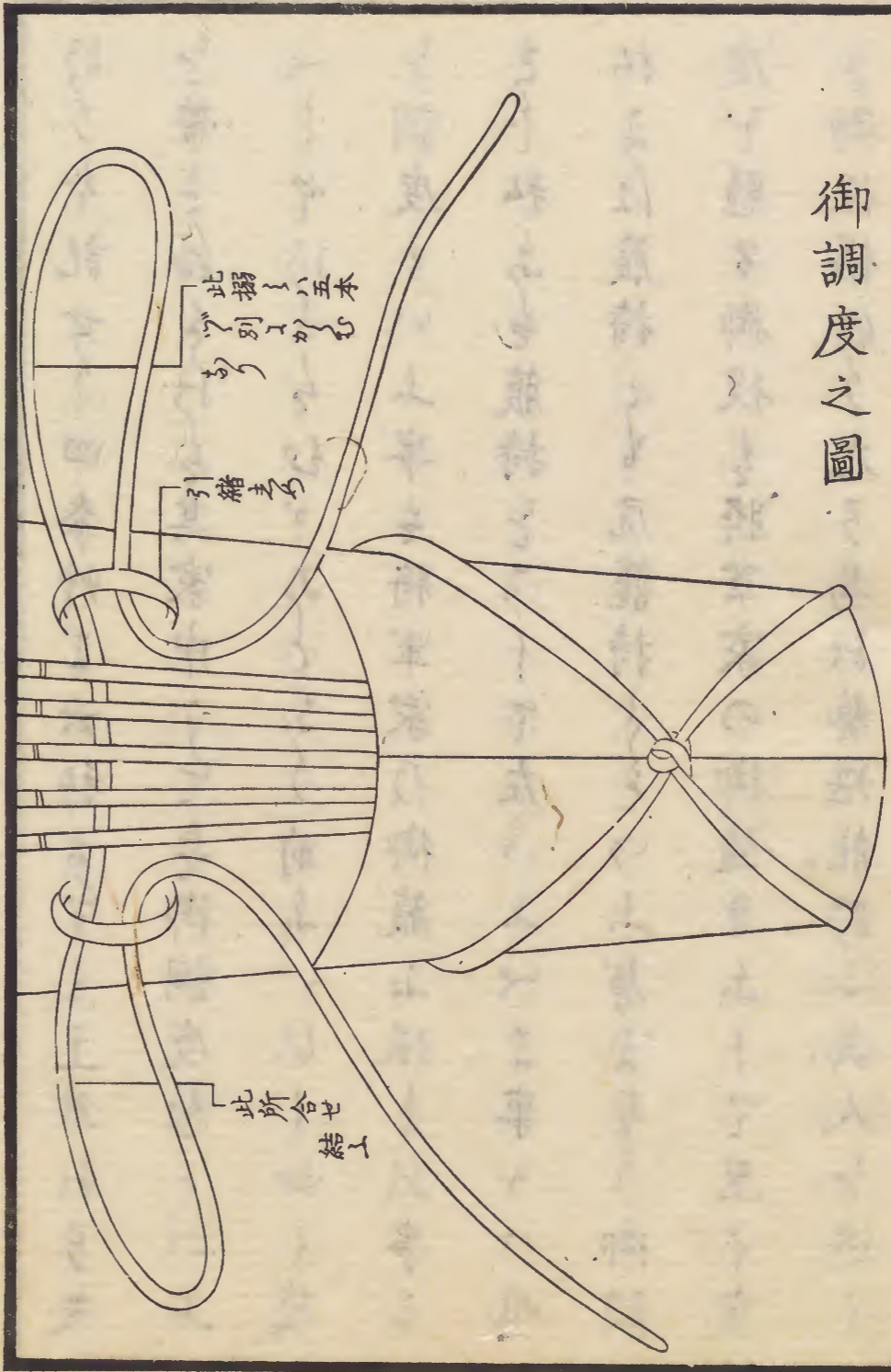
達しき侍神武武士御調度を懸るなり是を御調
 度懸の御役といふなり布衣記齋藤越前守助
成記永仁三年
 八月一調度懸事上下同色なりを上げ刀を以
 りて其を弑物ひ弓を持ち其を弑物をあはれ左乃
 肩一懸け右に脇若下へ引伸く弦を引弑か
 にもつと次は白布と十徳に帯絹の如く平ら
 なる多其帯を以て其を弑腰にけり弓をばは
 りて上よりあはれなり程を右乃かこにうを本
 らげ弑一尺をうりてあはれ右若手あはれかこなる

日本書紀四三十一

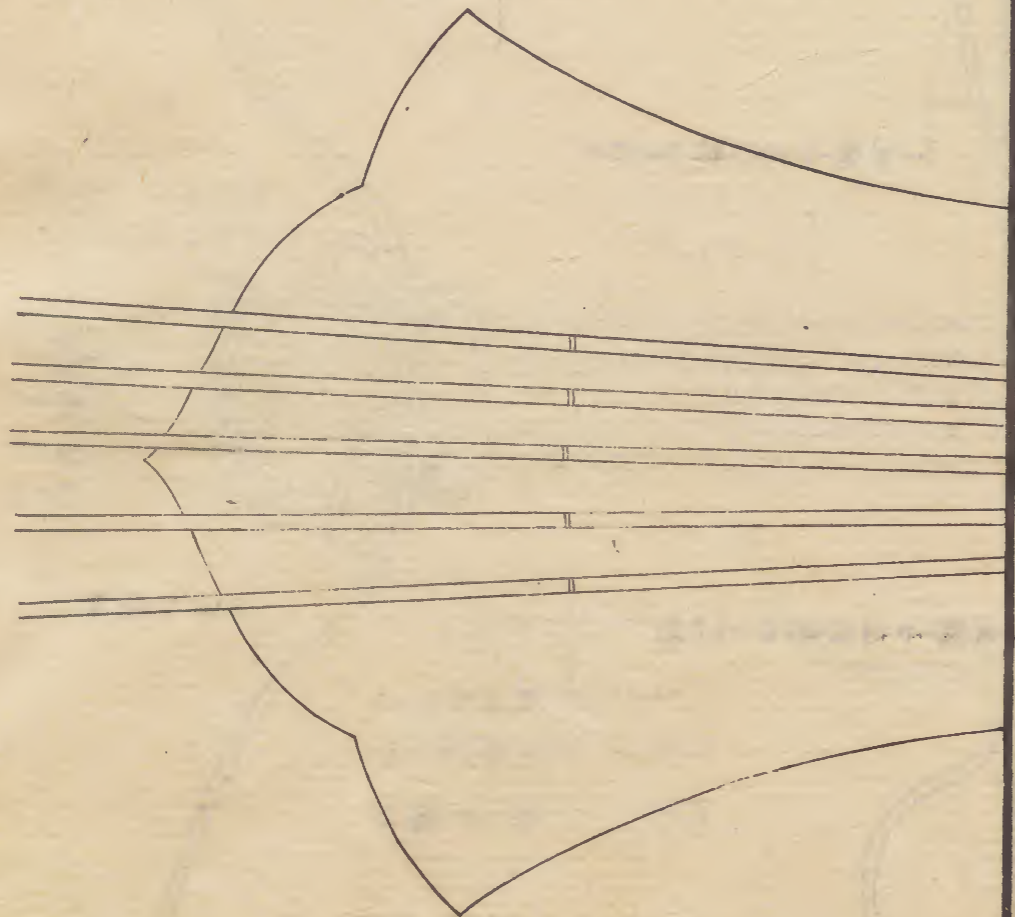
形を記せり四季艸云私めても主君み弓矢
 を帯をばはれり其家中にて其御調度懸といふ
 べし此の如くむがあはれ前ふいし如く籠
 を調度といふ事を將軍家乃御籠ふ限る事
 を私に籠持とも尻籠持ともいふ事なり御調
 度を懸る御役も將軍家の御隨身ふりて至る重
 き御役儀なり尤弓馬に藝堪能なり其人を選ん
 ぶありし事東鑑ふ記なり

東使恭居 所藏

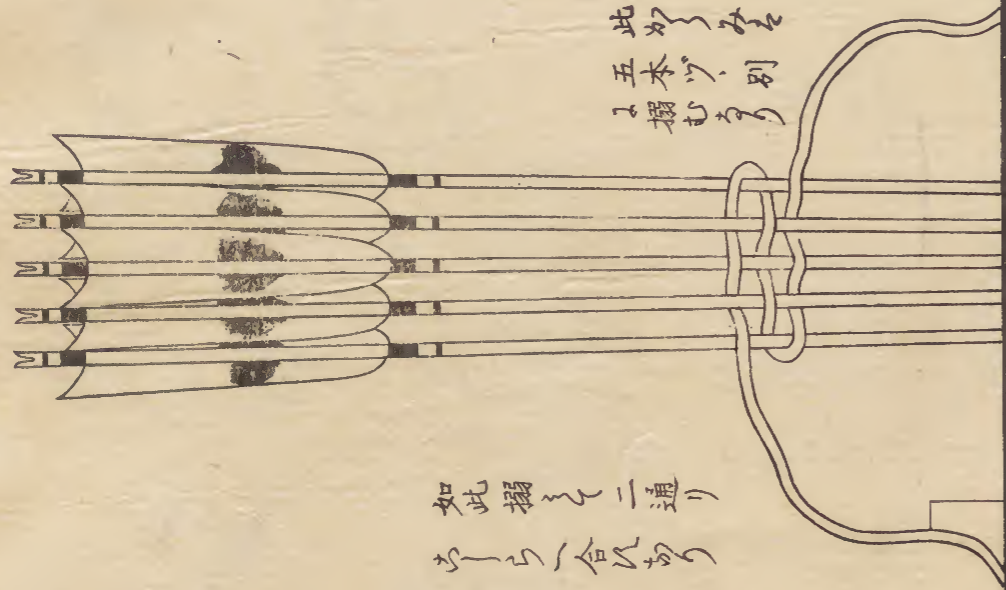
御調度之圖



日本古義四三十一

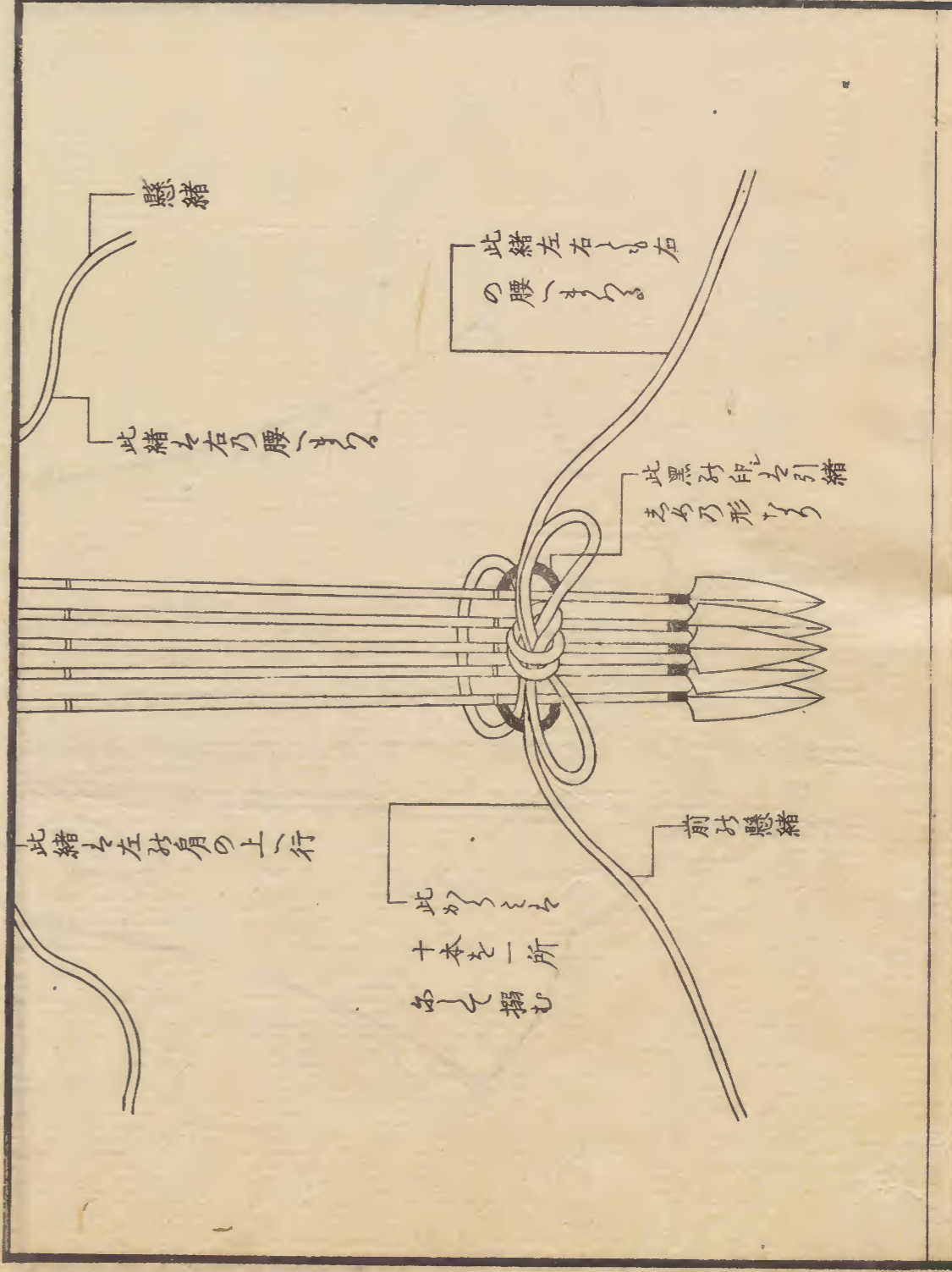


矢と征矢あり根と細根を懸緒と
 白黒薄黄み三色乃みくばく打ぬり
 前の懸緒と同前なり



此かきみ
 五本ツ別
 一揃む

如此揃くと二通り
 らら一合あり
 都合十本は矢數各
 一かきみ五本
 ツな



懸緒

此緒左右も右
 の腰へ

此緒を右の腰へ

此黒み印と引緒
 あり乃形なり

此緒を左の肩の上へ行

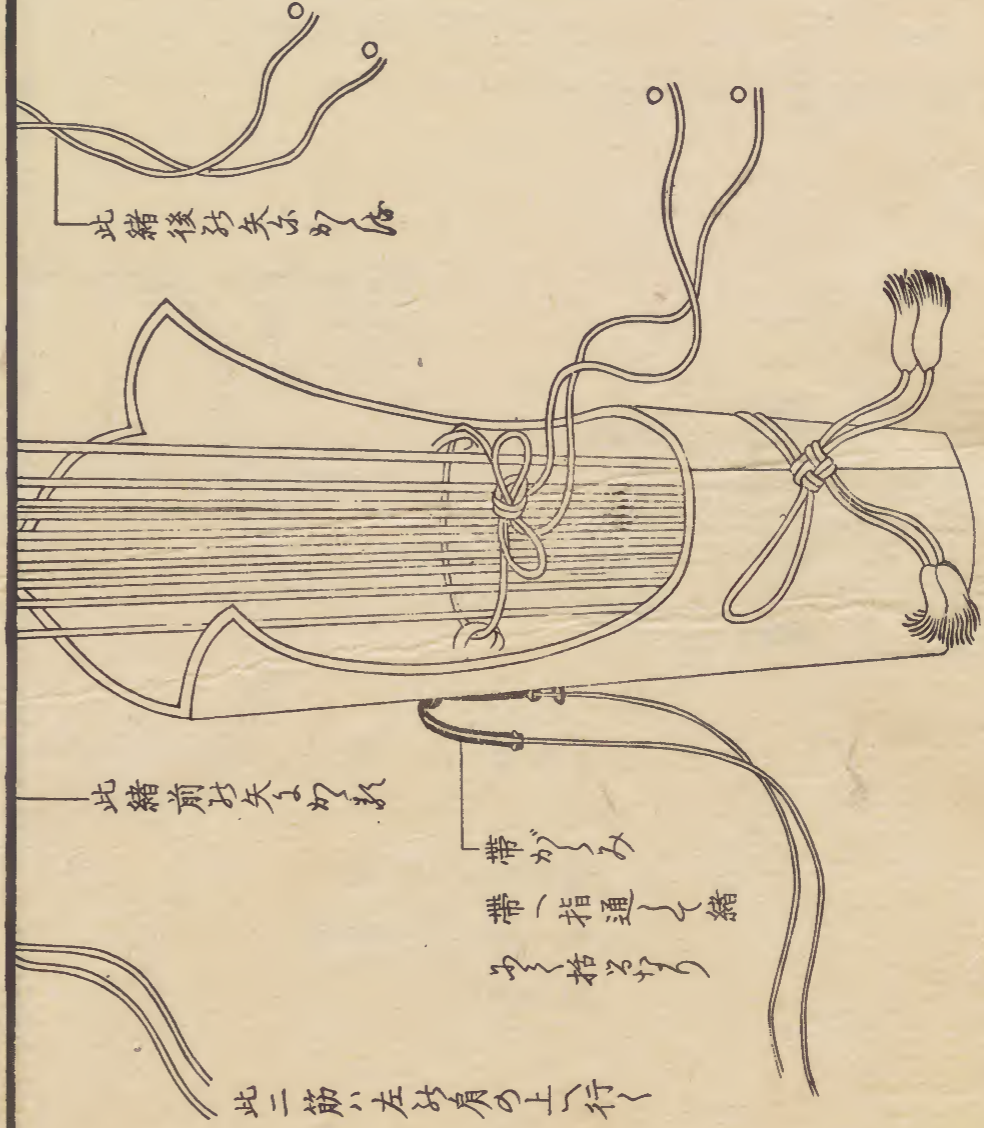
前懸緒

此かきみ
 十本を一所
 一揃む

此圖之矢數五筋ツ
 如〜二搦あり十
 本あり



○此段上下は緒四筋と右
 の腰お下をほり〜あり



此緒後お矢ふ〜あり

此緒前お矢ふ〜あり

帯が〜み
 帯（指通〜緒
 あり拵あり

此二筋は左は肩の上〜行〜

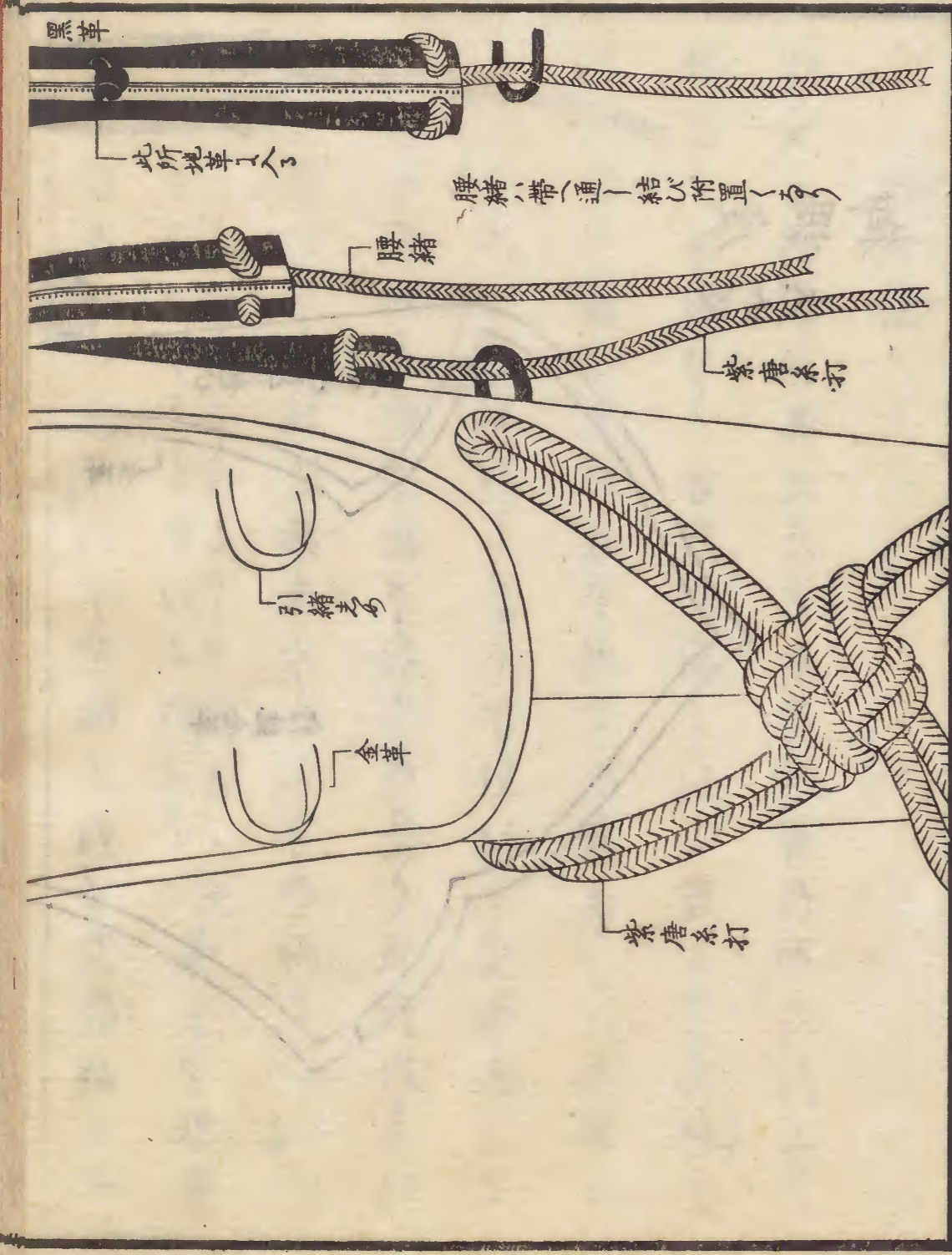
懸緒ハ左の肩け上より二筋
 右の腰より四筋めり
 懸緒ハ胸け通りより
 ワツ束一取て結ぶ
 一但一ワツ束は輪
 束より手一束ワ
 以分り結ぶ事あり



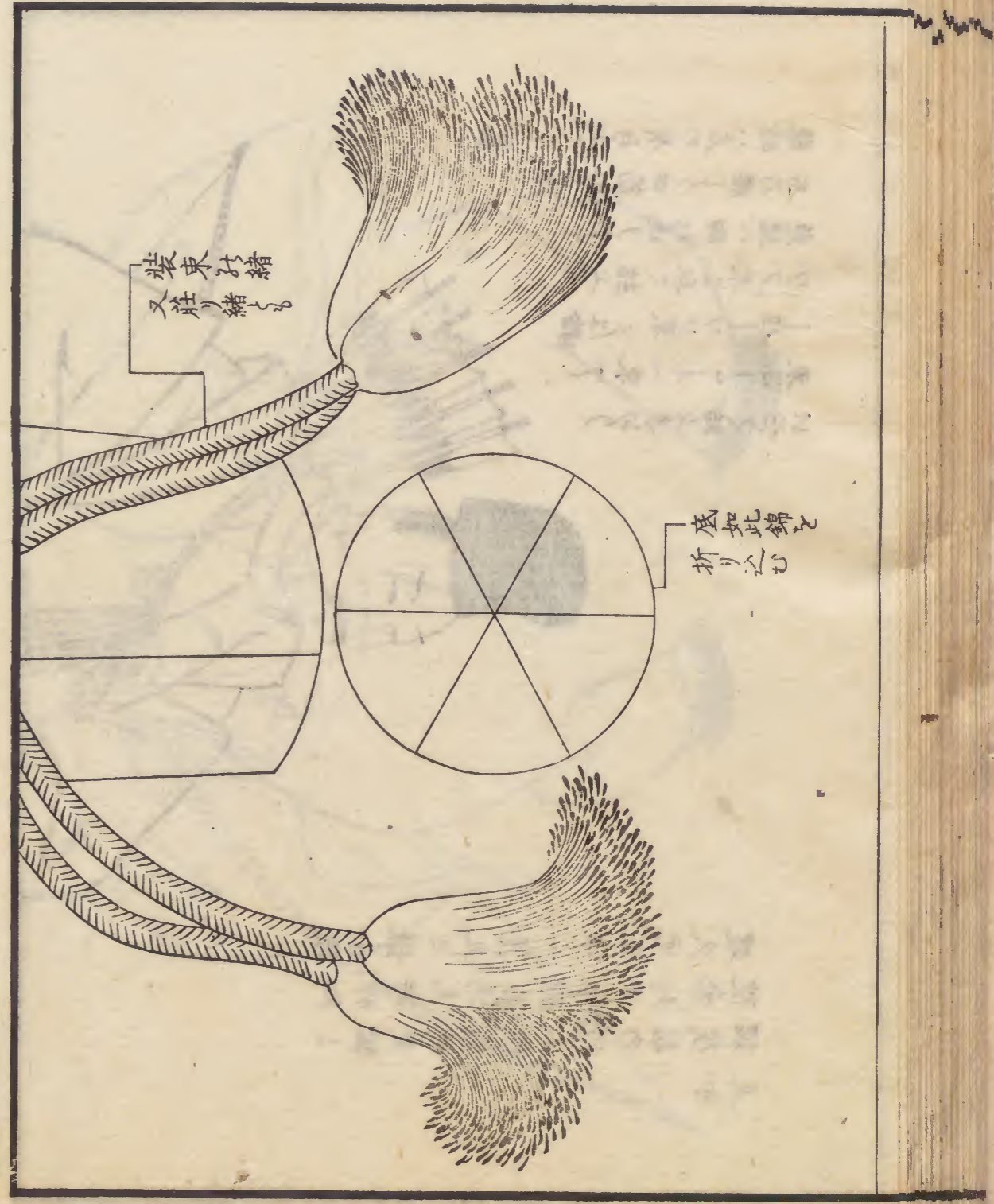
建久元年十一月九日鎌倉殿
 院参り日中村右馬允時經御
 調度懸の役候次と東鑑一
 見也



日本書紀四三十五



腰緒、帯（通）結び附置くる





日本古義四三七

無^ウ戸^ツ穂^ホ

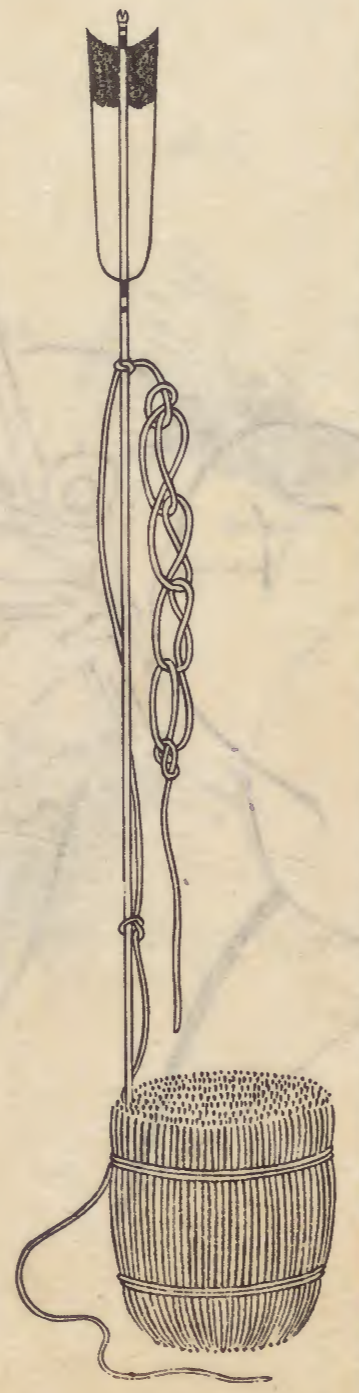
羽壺を狩場其具亦志多頼義朝臣乃頃に造り
 始先しそむなり古代狩場は山麓を真^マ藤^{フヂ}
 造りし麓を負ひ多り然るに麓亦くハ森林か
 ども分入る多矢りしりて便りくまゆ急し其
 利用を考へ多作て出き候そのあり此時代予狩
 場亦用ひしそむ無^ウ戸^ツ穂^ホといふそのあり無^ウ戸^ツ穂^ホ
 根ごうり指にそむふし室形く矢藁^{カサ}を穂手
 と明りそれし多りやいふ詞あり
 と造り矢を一本竿にして搦し候を空^ク鳴^ナ好く候

弓の如くして習ひを修めしむるは故に懸
 緒を切て腰の邊より一ツをとりて附きばさく
 かゝゆれしむる弦袋を籠り腰緒に附くる如く
 糸附る家形は行路を替弦し眞蓋に内裏に入
 るまじりしむる

無戸之圖

今乃世も田舎にて婚姻はとれ無戸と名きて蒙り
 繩を巻ぬるゝをれを持て祝をゆゑとあり此無戸
 小似せれその由をよかしく名を家あり但しウツと
 打なり物を打つ具に名なり鞭をムチともブナと
 丸轉ひしと同一

日本書紀四三十九



山門僧傳繪卷に見ゆ 土佐光信画
羽壺に表矢指しある圖



山門僧傳繪卷に見ゆ
 羽壺に表矢指しある圖

元祖土佐基光相撲繪糸見也
 相撲節會御隨身見物人を制とる圖體なり
 壺胡籙と表矢指しある圖



日本古義四十四



元祖土佐基光相撲繪糸見也
 相撲節會御隨身見物人を制とる圖體なり
 壺胡籙と表矢指しある圖

矢籠

尻籠ハ鎌倉殿み代乃製あり將軍家の御籠をば
御調度と稱し重しなり籠々大将み器と士
と憚りて籠伐畧して尻籠を製して用ひあり
矢尻あり籠其代あり是を籠尻籠といへり前
と根受あり籠記調度懸み條り前ふををゆひ
といひ後みえびら附やいひし尻籠と籠を別
かるしゆび籠を尻籠とも又胡籙矢籠とい
矢籠を籠といひし事なき
いしなり今みせり行路尔持をふは大概皆尻
籠あり稀小籠を持を籠を籠矢籠といへり此

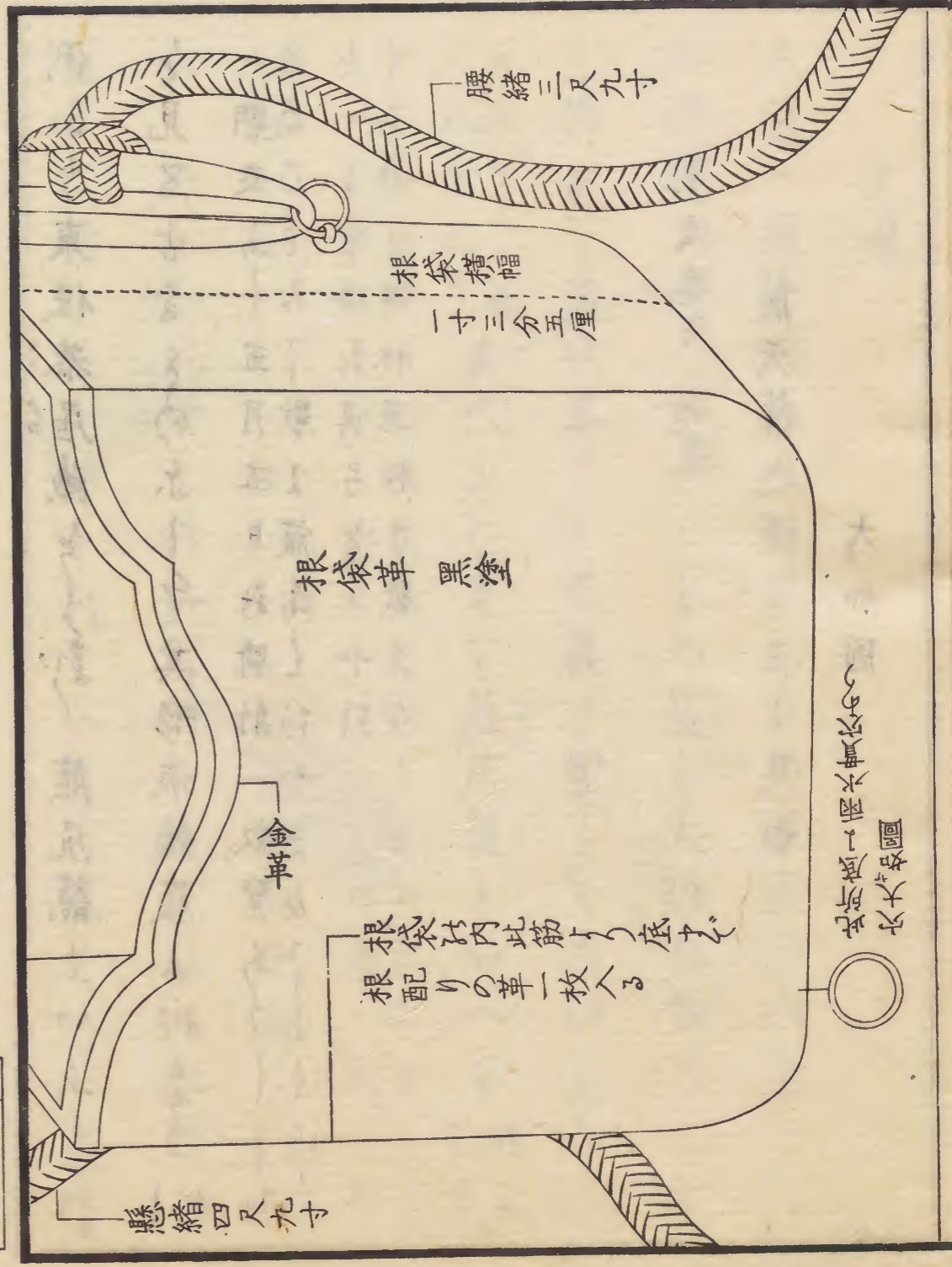
早古義四十一

例あり東使恭居藏を籠尻籠といふなり
と見る古なるものなり其形流鏑籠に似たり
朝廷あり五月五日み騎射 叡覽ありし
爲盛乃とみし歌に籠ありしや矢をさし
と一多常陸み真弓を引
くら舞と題林愚抄に載あり

東使恭居家藏

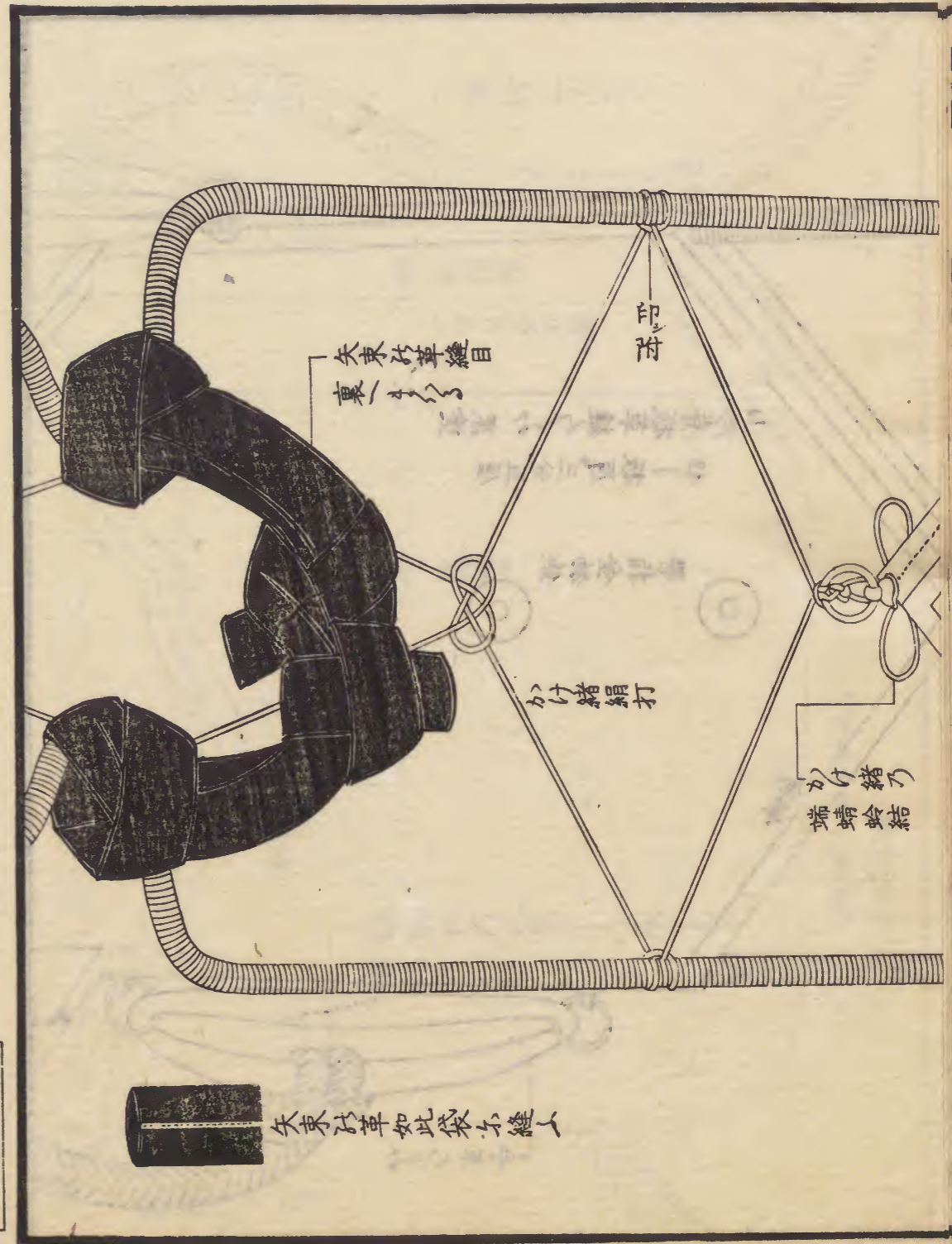
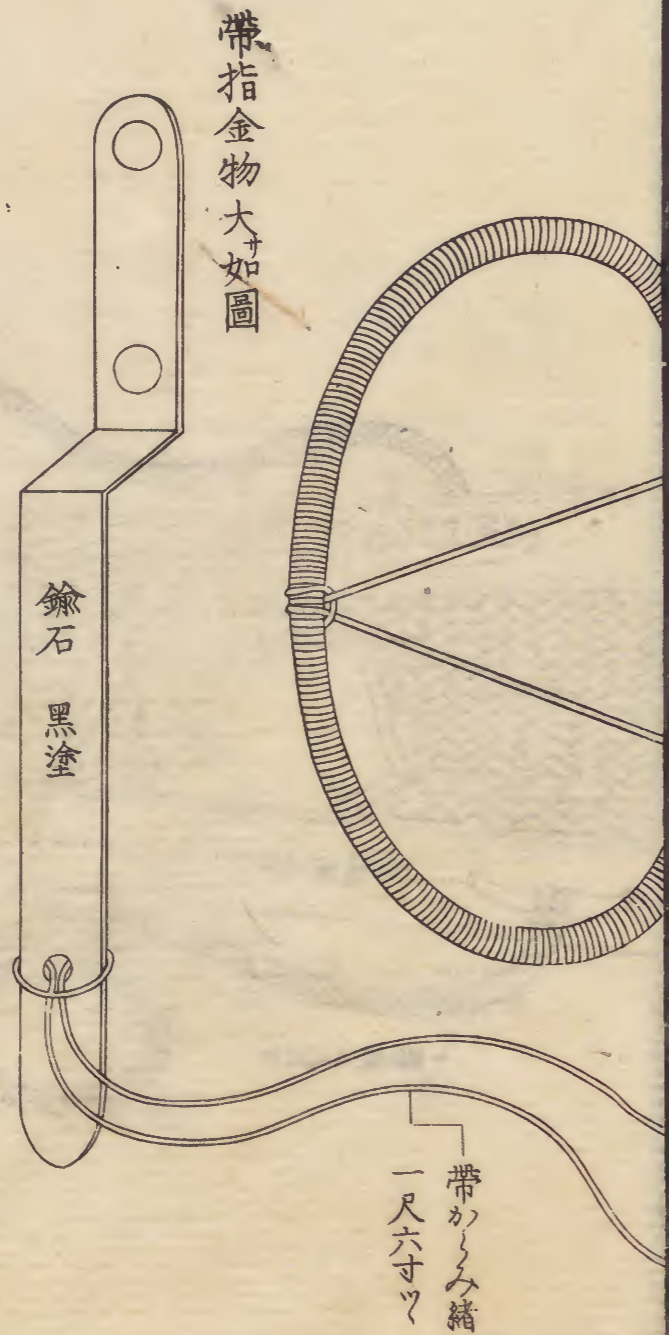
籠矢籠之圖 左より見也

大如圖

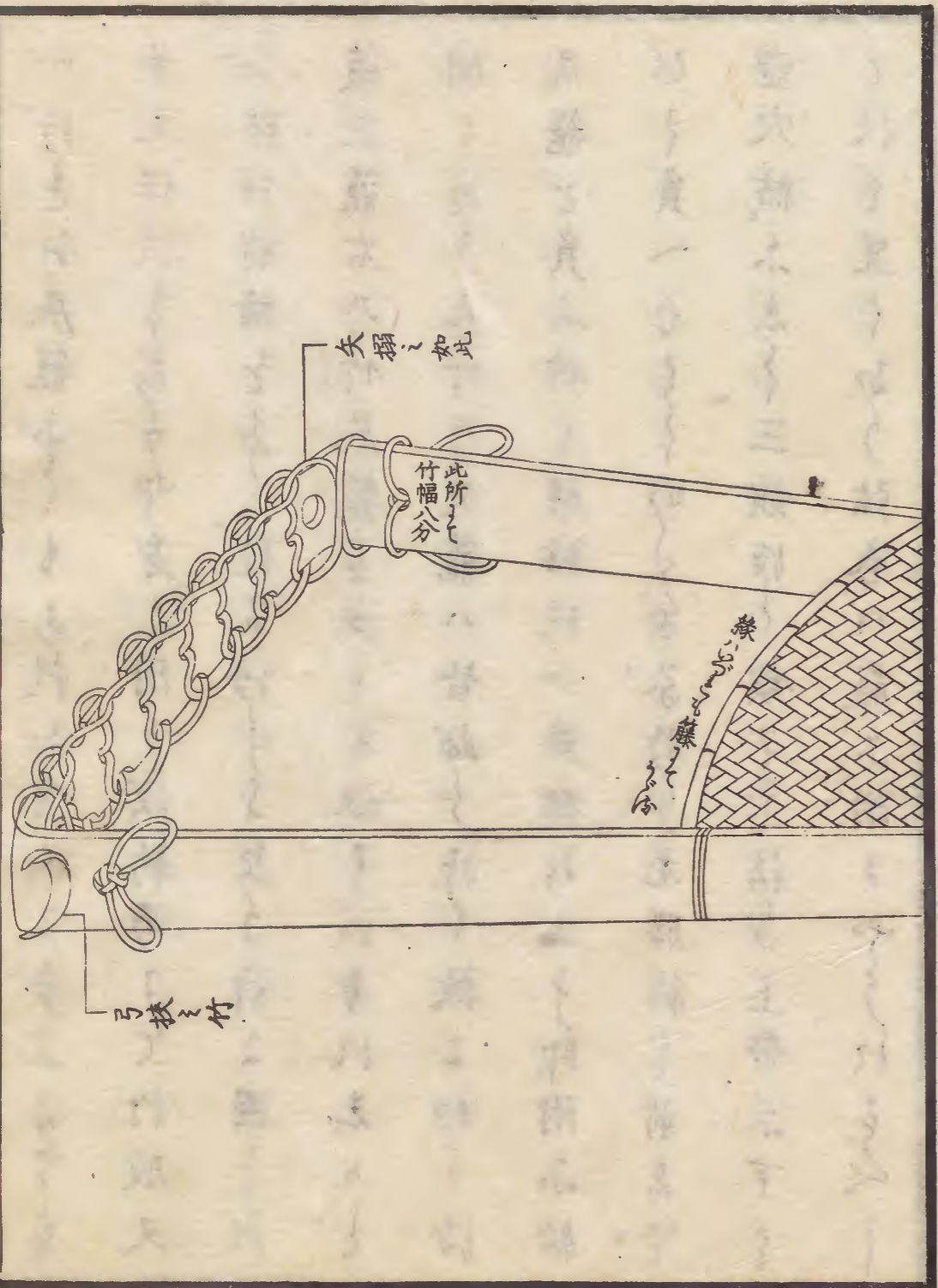


水袋
根袋
一
腰
緒
大
図

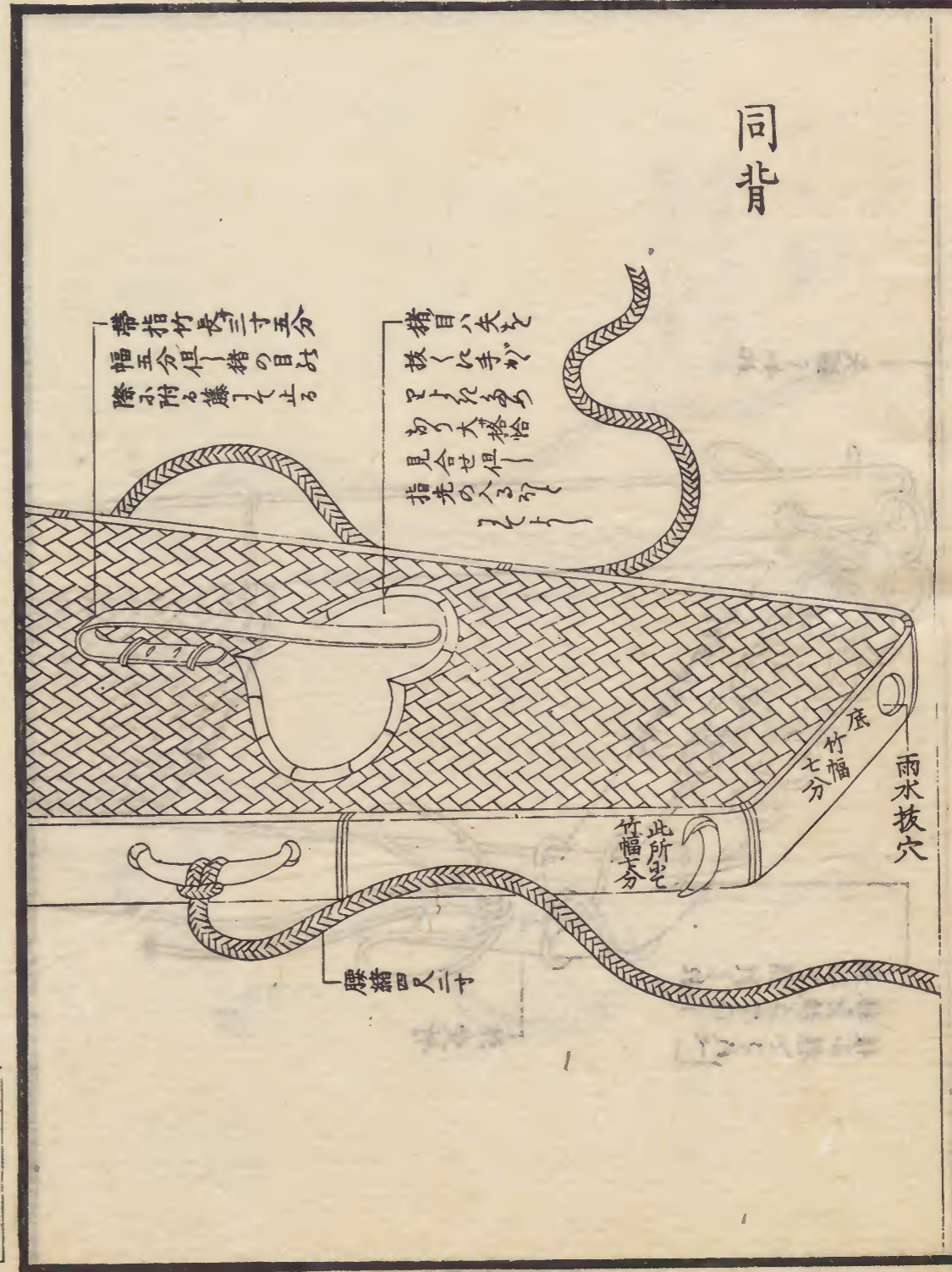
左の圖を竹尻籠と正朝が新意を以て製作する所をゆるく軽く便利ありとけわりの空く摸造し〜用ひ試むべし



日本古義四ノ四十三



同背



尻籠負ひや
うお本義

以ては尻籠を多しは身附くは騎馬しては股又
ハ鞍前輪を多しは多しは前より圖より
籠尻籠右乃竹尻籠と少しは狂は身は多し
附くあり此外乃矢籠ハ皆婦は故はか
尻籠を負ふ時を腰緒は一筋棹は上り印附小結
ひく負へむはかむはなり充腰緒を前め
壺穴結ぶは三鎖は鎖はは上帯下と
て挟く置くあり弦巻ハ籠附るやうに

日本書紀卷六

籠矢母衣
をかふ事
いふ事

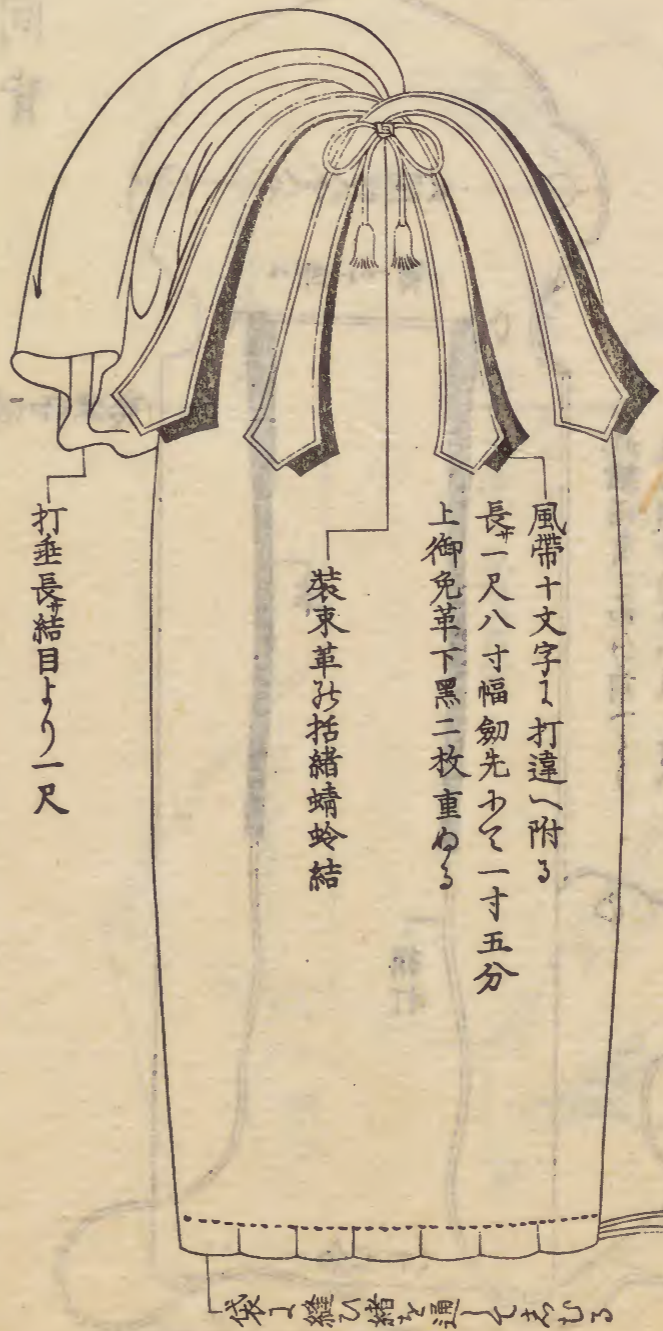
負矢臺

負矢臺ハ用意は征矢百も二百を指して矢母衣
をかふて小者より負くは軍旅ハ用也器具あり矢
母衣をかふは母衣は括緒を兩の猪目
通ふ止るは矢用也其時ハ括緒を解きて
母衣を上へて矢を取らる此矢母衣を
籠にかかるといふは籠は飾り置く時立ちたる矢
を懸く置く事をいふ形也此矢母衣を弓袋は
ふくは唯塵埃を除くむは多しは具は
負矢臺も其の中古より其物なり

矢母衣之圖

長四尺五寸
幅一尺八寸

弓袋み如く糸製以薄紙絹を用也但絹乃内一
母衣骨を入る風雨時糸と骨とを以て



風帶十文字一打違一附
長一尺八寸幅劔先少く一寸五分
上御免革下黒二枚重ぬ

装束革み括緒蜻蛉結

打垂長結目より一尺

袴

袋一纏五指の黒一ひたす

日本古義四四八

弓器小蜻蛉
み表を用也
る古義

弓器小蜻蛉み表を用也事ハ蜻蛉を一名勝虫
といへむ勝といふ祝意を合せて用ゆ義あり
雄畧天皇四年小野にて御獵ありて天皇乃
御臂を蛇刺しけり小蜻蛉來多其蛇を喰ひて飛
去りては天皇蜻蛉を美賞せ給ひ御口号
ありし事日本書紀に見えり紫衣を穿り蜻蛉
一名を勝虫や名を以り其御獵ありし小野を
大和國芳野あり其地小蜻蛉の小野又蜻蛉は龍
かといへる舊名遺るなり

指懸

指懸ハ太古ユカケ神代イニシより其製あり第二綏靖天皇御代より角の懸乃製り其製鹿角を造り内をえりぬまゝ大指をうり糸指次あり今の世も朝鮮に用ひ懸カキ朝鮮糸ツキと云ふ異なりあやれ懸カネとは弦を懸る器を懸といふなり是を後代に彈懸ハネキカケをいふあり

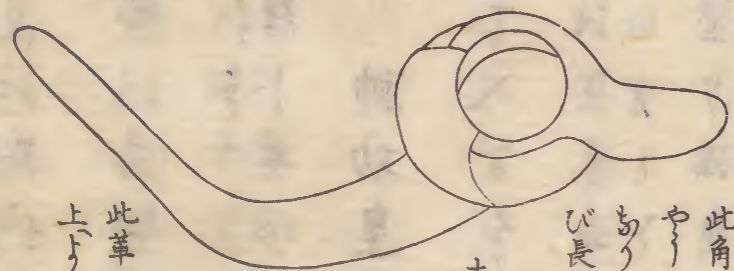
角指懸之圖

日本古義四ノ四九

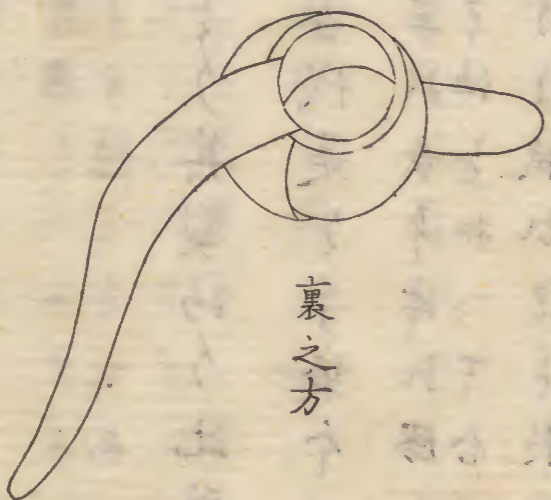
此角懸を大指糸指し出さば角に弦をうけ大指乃腹と人指の脇を弦みかちある矢筈をうきみ人指長高指より弦をうきを角の先端握り引くあり

此角手の内へはさ
やうふ大指へ入る
あり此角一人指の
び長高指をかける

表之方



裏之方



此筆の先を大指のうきと角の間へ
上より下へ通し下へ引まち置き

兩濕用意の
指懸

崇神天皇御代至りて始め多革を以て三指
懸を製は其製吉部祕訓抄に圖を傳へたり
指懸の指は其の古きを是と指懸といふ又上一具
古弓に懸し事ありにたりる弓懸と云也
指懸を神功皇后御代より其製あり此懸を
手首にて入るる此るは古代是を手袋をいへ
る 兩濕は用意を指懸の革は表に漆に膠と鶏
卵乃白實とを少く交へて油を和へて合せ
と塗る漆氣ありてありて拭ひて右の掌に
但し十返を塗りて又太刀お後乃代に至り自
と持り明けありて手綱又太刀お後乃代に至り自
然り弓長くありて隨ひ矢束を引く事を懸の製

日本書紀四十五

指矢と
本義

もかきり多紫近き世慶長に頃至りて射禮に
も武射ありて遊興に對し花形を以て事
とて竹林貞次武用は實業を失ふむありて
思ひて此志を心底に巧みし此旨城弟子淺岡
平兵衛に進め蓮華王院に於て指矢根矢を射
はむ指矢といふ義ありて調度懸に指矢を懸
いふも調度懸に矢といふ義ありて同く訣あり
明月記に建保元年七月廿五日公卿勅使發遣前
驅平忠繁左衛門調度懸折鳥摺子紫經中懸矢弓
等如常又花山院忠定卿記永三年九月十六
日室町入道准后大相國御登山侍二人右近將監
橘忠時調度懸島丹子衣立重藤弓懸矢小紫手革右

衛門尉藤原季行精上持弓二所
藤懸矢指小表黒革と見之多ま

淺岡一刻亦して始りて五十一筋の矢を射通し

事り此時貞次工夫して懸け大指を長く太くし

て革をかみえり製し其形烏帽子に似るれ

る帽子といひ習し其後吉田大内藏矢數

の頃帽子の薄き銅を入きて用ひしが後吉見

經工夫して銅を重くする所は故に

帽子の角を入きかえり吉見臺右衛門經武入

衛門葛西蘭右衛門和佐大八等師あり寛永二十

年六月朝鮮人旅館於季萬戸が強弓より引勝

永吉善書

乃外聞といふべし後經武季萬弓を製し且弓法

大全二百八十卷を著述し猶經武一代射藝の物

語を古射雜談に詳記し右に云季萬戸が用

ひし強弓并矢但し此矢乃重四十二匁あり此矢

を以て一町やと先ず的をうけ射る小けしに行

くは乃強弓あり右此角入に四懸を矢數射る

稽古不用ゆ懸る懸る射るに用ゆる懸るは

つゞげ然る小的射法なり此四懸を用ゆれを聞

見えり大に古義以失へり三懸か懸る本容なり

了心得べし第一堂射を達人第一の射業あり

手乃心が習練を業なり強矢妻矢數射

る鍛錬より自然と出るなり是皆自得の射業なり

若孤城兵少くして四方に敵を受を多し給て急
 日ふ一萬餘乃矢を彈に射手其一方に當りて急
 も今の世ふ至りて一人當百の功ありて多し通さむ事
 との朝此事を思ひて射業の實業を失ふ小至まり
 正射の事志願の旨を申出に即舊例ありよ
 井左近の宮家より此事みゆるを蓮華王院に於て
 州の藩吉田次郎吉貞吉を以て蓮華王院に於て
 遠矢を射さく免繼椽次再興せり時天保五年甲
 午四月廿八日此上遠矢を射て射業の邪正
 を考へ鍛錬し事理を嗜まば本意ふかる事
 形保元乃頃紀伊國蕪坂の源太といふ者得長壽
 院の御堂ふ來りて初め南に築地を際芝乃上り
 心ごはほりて御堂の軒端の下を遠矢に射渡り
 次は椽乃上りて御堂の軒端の下を遠矢に射渡り
 保元日記

日本書紀四十五

且見之又遠矢射或指矢一射るを源平盛
 衰記平家物語等に見えざる指矢とは征矢の事
 類を以ふ木鋒

